

とがつくり首を掉つて、

「験が見えぬぢやて。」

験なきにはあらずかし、御身の骸は疾く消えて、賤機山に根もあらぬ、裂けし芭蕉の幻のみ、果敢なく其處に立てるならずや。

ごほくと頷き、咳入りつつ、婆さんが持つて来た甘酒を、早瀬が取らうとするのを、取らせまいと、無言で、はたと手で拂つた。此の時、夫人は手中で口を壓へながら、甘酒の茶碗を、衝と傍へ奪つたのである。

十一

「芭蕉の葉煎じたを立續けて飲みまして、效験の無い事はあるまいが、疾く快うならうと思ひなされる慾で、焦らつしやるに因つて尙よくない、氣長に養生さつしやるが何より藥ぢや。喃、主、氣の持ちやうに依るぞいの。」

と婆さんは渠を慰めるやうな、自分も勢の無いやうな事を云ふ。

病人は、苦を訴ふるほどの元氣も持たぬ風で、目で頷き、肩で息をし、息をして、

「此頃は病氣と張合ふ勇もないで、何うなとしてくれ、最う投身ぢや。人に由つては大蒜が可え、

と云ふだがな。大蒜は肺の薬に成るげぢやけれども、私は恚う見えても癆咳とは思はん、風邪のこじれぢやに因つて、熱さへ除れば、と矢張芭蕉ぢや。」

愚痴のあはれや、繰返して、杖に縋つた手を置替へ、

「煎じて飲むはまだるこいで、早や、根からかぶりつきたいやうに思ふがい。」

と切なさうに顔を獅噛める。

「焦らつしやる事よ、苛れてはようない、ようないぞの。まあ、休んでござらんか、よ。主あ何んなにか大儀ぢやらうなう。」

「些と休まいて貰ひたいがの、」

管子と早瀬の居るのを見て、遠慮らしく、もぢくして、

「腰を下ろすと能う立てぬで、久しぶりで出た次手ぢや、やつと其處等を見て、歸りに寄るわい。見霽へ上る、此の男坂の百四段も、見たばかりで、最うく慄然とするく、」

と重さうな頭を掉つて、顔を横向きに杖を上げると、尖がぶるく震ふ。

此方に腰掛けたま、胸を伸して、早瀬が何か云はうとした、(構はず休らへ)と聲を懸けさうだつたが、夫人が、ト見て、指を弾いて禁めたので黙つた。

「そんなら歸りに寄りなされ、氣をつけて行かつしやいよ。」

物は言はず、睡るが如く頷くと、足で足を押動かし、寝ン寝子廣き芭蕉の影は、葉がくれに破れて失せた。やがて此の世に、其の杖ばかり残るであらう。其の杖は、野墓に立てても、蜻蛉も留まるまい。病人の居たあとしばらくは、餌を飼つても、鳩の寄りさうな景色は無かつた。

「お婆さん、」

と早瀬が調子高に呼んだ。

さすがに滅入つて居た婆さんも、此の若い、威勢の可い聲に、蘇生つたやうに成つて、

「へい、」

「今の、風説なら最う止しつこ。私は見たばかりで胸が痛いよ。」

と、威しては可けさうもないので、片手で拜むやうにして、夫人は厭々をした。

「否、一ツ心當りは無いか、家を聞いて見ようと思ふんです。見物より、其の方が肝心ですもの。」

「あ、然うね。」

「何處か、貸家はあるまいか。」

「へい、無い事もござりませぬが、旦那様方の住まつしやりますやうな邸は、此の居まはりにはござりませぬ。鷹匠町邊をお聞きなされましたか、何うでござります。」

「其の鷹匠町邊にこそ、御邸ばかりで、僕等の住めさうな家はないのだ。」

「何んなのがお望みでござりまするやら、」

「廉いのが可い、何でも廉いのが可いんだよ。」

「早瀬さん。」と、夫人が見つともないと壓へて云ふ。

「長屋で可いのよ、長屋々々。」

と構はず、遣るので、又目で叱る。

「へ、お幾干ばかりなのをお捜しなされまするやら。」

心當りがあるか、ごほりと咳きつつ、甘酒の釜の蔭を膝行つて出る。

「静岡ぢや、お米は一升幾干だい。」

「え、。」

「厭よ、後生。」

と婆さんを避けかたふ、立構へで、夫人が肩を擦寄せると、早瀬は後へ開いて、夫人の肩越に婆さんを見て、

「それとも一圓に幾干だね、其から聞いて屋賃の處を。」

「最う、私は、」と堪りかねたか、早瀬の膝をハタと打つと、赤らめた顔を手巾で半ば蔽ひながら、

茶店を境内へ衝と出る。

十三

何處も變らず、風呂敷包を首に引掛けた草鞋穿の親仁だの、日和下駄で尻端折り、高帽と云ふ
壯俊などが、四五人境内をぶら／＼して、何を見るやら、孰れも仰向いてばかり通る。

石段の下あたりで、縁に包まれた夫人の姿は、色も一際鮮麗で、青葉越に鯉の躍る池の水に、
影も映りさうにイんだが、手巾を振つて、促がして、茶店から引張り寄せた早瀬に、

「可い加減になさいよ、極りが悪いぢやありませんか。」

「はい、お忘れもの。」

と澄ました顔で、洋傘を持つて来た柄の方を返して出すと、夫人は手巾を持換へて、然でない
方の手に取つたが……不思議に此の男のは汗ばんで居なかつた。誰のも、恚う云ふ際は、持つた
あとがしつとり、中には、じめ／＼とするのさへある。……

夫人は一寸俯目に成つて、軽く其の洋傘を支いて、

「能く氣がついてねえ。(小さな聲で)——大儀、」

「はッ、主税御供仕りまする上からは、御道中聊かたりとも御懸念はござりませぬ。」

「静岡は暢氣でせう、ほ／＼ほ／＼。」

「三等米なら六升臺で、暮しも樂な處ですつて、婆さんが言ひましたつけ。」

「あら又、厭ねえ、貴下は。後生ですから其の(お米は幾干だい)と云ふのだけは堪忍して頂戴
な。最う私は極りが悪くつて、同行は恐れるわ。」

「え、然うおつしやれば、貴女もどうぞ其の手巾で、恚う、お招きに成るのだけは止して下さ
い。餘りと云へば紋切形だ。」

「何うせね、柳橋のやうなわけには……」

「否、今も、子守女めらが、貴女が手巾をお掉りなさるのを見て、……は、は、は、」

「何ですつて、」

「は、は、は、は、は、」

と事も無げに笑ひながら、

「(男と女と豆煎、一盆五厘だよ。)ツツて、飛んでもない、ワツと噓して遁げましたぜ。」

ツツと横を向く、脊が屹と高く成つた。引かなぐつて、其の手巾をはたと地に擲つや否や、裳
を蹴て、前途へつか／＼。

爾時義經少しも騒がず、落ちた堇色の絹に風が戦いで、鳩の羽癩と薰るのを、悠々と拾ひ取つ

て、ぐつと袂に突込んだ、手を其まゝ、袖引合はせ、腕組みした時、色が變つて、人知れず俯向いたが、直ぐに大跨に夫人の後について、社の廻廊を曲つた所で追着いた。

「夫人。」

「……………」

「貴女腹をお立てなすつたんですか、困りましたな。知らぬ他國へ参りまして、今貴女に見棄てられては、東西も分りませんで、途方に暮れます。何うぞ、御機嫌をお直し下さい、夫人。」

「……………」

「英吉君の御妹御、菅子さん、」

「……………」

「島山夫人……河野令嬢……不可い、不可い。」

と口の裡で云つて、歩行き、

「眞個に機嫌を直して、貴女、御世話下さい、惣か、貴女にお便り申したために、今更獨ぢや心細くつて何うすることも出来ません。最う決して貴女の前で、米の直は申しますまい。其の代り、貴女もどうぞ貴族的でない、僕が住れさうな、實際、相談の出来さうな長屋式のお心掛けなすつて下さい。實は其の御様子ぢや、二十圓以内の家は念頭にお置きなさらぬやうに見受けたも

のですから、聊さか諷する處あるつもりで、

何時の間にか、有名な随神門も知らず、通越した、北口を表門へ出て了つた。

社は山に向ひ、直ぐ畠で、却つて裏門が町續きに成つて居るが、出口に家が並んで居るから、其の前を通る時、主税も黙つた。

夫人は固より口を開かぬ。

やがて茶畑を折曲つて、小家まばらな、場末の町へ、未だツンとした態度でさんく入る。

大巖山の町の上に、小さな溝があるばかり、障子の破から人顔も見えないので、其時ツツと寄つて、

「ものを云つて下さいよ。」

「……………」

「夫人。」

「……………」

十四

少時——主税も最う口を利かうとは思はない様子に成つて、別に苦にする顔色でもないが、腕

を拱いた態で、夫人の一足後れに跟いて行く。

裏町の中程に懸ると、兩側の家は、孰れも火が消えたやうに寂寥して、空屋かと思へば、蜘蛛の巣を引くやうな糸車の音が何家とも無く戸外へ漏れる。路傍に石の古井筒があるが、缺目に青苔の生えた、其にも濡色はなく、ばさばさ乾燥いで、流も乾びて居る。其處等何軒かして日に幾度と數へるほどは米を磨ぐものも無いのであらう。時々陰に籠つて、しつこしの無い、咳の聲の聞えるのが、墓の中から、未だ生きて居ると唸くやう。はづれ掛けた羽目に、咳止飴と黒く書いた廣告の、其を賣る店の名の、風に取りられて讀めないのも、何となく世に便りが無い。

振返つて、來た方を見れば、町の入口を、眞暗な隧道に樹立が塞いで、炎のやうに光線が透く。其の上から、日のかげつた大巖山が、其處は人の落ちた谷底ぞ、と聳え立つて峰から哄と吹き下した。

かつ散る紅、靡いたのは、夫人の褌と軒の鯛で、鯛は恵比壽が引抱へた處の繪を、色は褪せたが紺暖簾に染めて掛けた、一軒(御染物處)があつたのである。

廂から突出した物干棹に、薄汚れた紅の切が忘れてある。下に、荷車の片輪はづれたのが、塵芥で埋つた溝へ、引傾いて落込んだ——是を境にして軒隣りは、中にも見すばらしい破屋で、煤のふさふさと下つた眞黒な潜戸の上の壁に、何の禁厭やら、上に春野山、と書いて、口の裂けた

白黒まだらの狗の、前脚を立てた姿が、雨浸に浮び出でて朦朧とお札の中に懸れて活るが如し。それでも鬼が來て覗くか、樂書で捏ちたやうな雨戸の、節穴の下に柎の枝が落ちて居た……鬼も屈まねばなるまい、最ど低い屋根が崩れかゝつて、一目見ても空家である——又何うして住まれよう——お札も怒る家に在つては、軒を傳つて狗の通るやうに見えて物凄しい。

フト立留まつて、此の茅家を覗めた夫人が、何と思つたか、主税と入違ひに小戻りして、洋傘を袖の下へ横へると、惜げもなく、髪で、件の暖簾を分けて、隣の紺屋の店前へ顔を入れた。

「御免なさいよ、御隣家の屋を借りたんですが、」

「何でございますと、」

と、頓興な女房の聲がする。

「家賃は幾干でせうか。」

「あ、貞造さんの家の事かね。」

餘り思切つた夫人の舉動に、呆氣に取られて茫然とした主税は、(貞藏)の名に鋭く耳をそばだてた。

「空家ではござりませぬが。」
「然う、空家ぢやないの、失禮。」

と肩の暖簾をはづして出たが、

「大照れ、大照れ、」

と言つて、莞爾して、

「早瀬さん、」

「……………」

「人のことを、貴族的だなんのつて、いざ、と成りや私だつて、此のくらゐるな事はして上げるわ。此の家ぢや、貴下だつて、借りたいと言つて聞かれないでせう。一寸、これでも家の世話が私にや出来なくつて？」

さすがに夫人も是は離れ業であつたと見え、目のふちが颯と成つて、胸で呼吸をはずませる。

其の燃ゆるやうな顔を凝と見て、やゝあつて、

「驚きました。」

「驚いたでせう、可い氣味、」

と嬉しさうに、勝誇つた色が見えたが、歩行き出さうとして、其の茅家を最う二目。

「しかし極が悪かつてよ。」

「何とも申しやうはありません。當座の御禮のしるし迄に……………」と先刻拾つて置いた董色の手巾

を出すと、黙つて頷いたばかりで、取るやうな、取らぬやうな、歩行きながら肩が並ぶ。袖が擦合つたまゝ、夫人が未だ取られぬのを、離すと落ちるし、然うかと云つて、手はかけて居るから……引込めもならず……提げて居ると……手巾が隔てに成つた袖が觸れさうだったので、二人が齊しく左右を見た。兩側の伏屋の、あゝ、何の軒にも怪しいお札の狗が……

貸小袖

十五

今來た郵便は、夫人の許へ、主人の島山理學士から、歸宅を知らせて來たのだらう……と何となく然う云ふ氣がしつ——三四日日和が続いて、夜に成つても最う暑いから——長火鉢を避けた食卓の角の處に、さすがに未だ端然と坐つて、例の（菅女部屋）で、主税は獨酌にして、ビール。

扉の前を、用水が流るゝために、波打つばかり、窓掛に合歡の花の影こそ揺れ揺れ通へ、差覗く人目は届かぬから、縁の雨戸は開けたまゝで、心置なく飲めるのを、あれだけの酒好が、何爲か、夫人の居ない時は、硝子杯へ注げる口も苦さうに、差置いて、何うやら鬱ぐらしい。

襖が開いた、と思ふと、羽織なしの引掛帯、結び目が摺つて、横に成つて、くつろいだ衣紋の、胸から、柔かにふつくりと高い、眞白な線を、読みかけた玉章で斜めに仕切つて、枉下りに其の線伸した手紙の片端を、北齋が描いた蹴出の如く、ぶる／＼とぶら下げながら出た處は、そんなよ藝者の風がある。

「漸つと寝かしつけたわ。」

と崩るゝやうに、ぼつたり坐つて、

「上の兒は、最う原つから乳母が好いんだし、坊も、久しく私と寝ようなんぞと云はなかつたんだけれども、貴下にかゝりつ切で構ひつけないし、留守にばつかりしたもんだから、先刻のあの取ツ着かれやうを御覽なさい。」

と手紙を見い／＼忙しさうに云ふ。如何にも此處で膳を出したはじめには、小兒が二人とも母様にこびりついて、坊やなんざ、武者振つく勢。目の見えない娘は、寂しさうに坐つた切で、頻りに、夫人の膝から帯をかけて両手で撫でるし、坊やは肩から負はれかゝつて、背ける顔へ頬を押着け、躲す顔の耳許へかじりつくばかりの甘え方。見るまにばら／＼に鬢が亂れて、面影も瘦せたやうに、口のあたりまで振かゝるのを搔い拂ふ其の白やかな手が、空を掴んで悶えるやうで、(乳母来ておくれ。)と云つた聲が悲鳴のやうに聞えた。乳母が、(まあ、何でござります、嬢ちや

まも、坊つちやまも、お客様の前で、)と主税の方を向いたばかりで、何時も嬢さまかぶれの、眠つたやうな俯目の、顔を見ようとしないので、元氣なく微笑みながら、娘の兒の手を曳くと、厭厭其は離れたが、坊やが何と云つても肯かなくつて、果は泣出して亂暴するので、時の間も座を惜しさうな夫人が、寝かしつけに行つたのである。

其處へ、しばらくして、郵便——だつた。

すら／＼と讀果てた。手紙を巻戻しながら顔を振上げると、亂れたまゝの後れ毛を、煩ささうに搔上げて、

「つひぞ思出しもしなかつた、乳なんか飲まれて、散々膏を絞られたわ。」

と急いで衣紋を繕つて、

「さあ、お酌をませう。」

瓶を上げると、重矣。

「まあ、些とも召喚らないのね。お酌がなくなつては不可い、一寸贅澤だわ。ほゝほゝ、家も極まつたし、一人で世帯を持つた時何うするのよ。」

「澤山頂きました、こんなに御厄介に成つては、實に濟みません……最う、徐々失禮ませう。」

と恐しく眞面目に云ふ。

「否、返さない。此間から、お泊んなさいお泊んなさいと云つても、貴下が悪いと云ふし、私も遠慮したけれど、可いわ、最う泊つても。今ね、御覽なさい、牛込に居る母様から手紙が来て、早瀬さんが静岡へお出なすつて、幸ひお知己に成つたのなら、精一杯御馳走をなさい、と云つて来たの。嬉しいわ、私。」

あのね、實は是は返事なんです。汽車の中でお目にかつた事から、都合があつて此方で塾をお開きなされるに就いて、些とも土地の様子を御存じぢやない、と云ふから、私がお世話をしてなると、其處はね、可いやうに手紙を出したの、其の返事、

と掌に巻き据ゑた手紙の上を、軽く一つ丁と拍つて、

「母様が可い、と云つたら、天下晴れたものなんだわ。緩り召食れ。而して、是非今夜は泊るんですよ。其のつもりで風呂も沸してありますから、お入んなさい。寝しなにしますか、それとも颯と流してから喫りますか。どちらでも、最う沸いてるわ。そして、泊るんですよ。可くつて、念を入れて、やがて諾と云はせて、

「あ、昨日も一昨日も、合歡の花の下へ来ては、晩方寂しさうに歸つたわねえ。」

十六

扱て湯へ入る時、はじめて理學士の書齋を通つた。が、机の上は亂雑で、其處に据ゑた座蒲團も無かつた、早瀬に敷かせて居るのが其らしい。

机には、廣げたまゝの新聞も幅をすれば、小兒の玩弄物も乗つて、大きな書棚の上には、世帯道具が置いてある。

湯は、だゞつ廣い、薄暗い臺所の板敷を抜けて、土間へ出て、庇間を一跨ぎ、据風呂を此の空地から焚くので、雨の降る日は難儀さうな。

其處に踞んで居た、例のつんつるてん鞠子の婢が、湯加減を聞いたが上鹽梅。

どつぶり沈んで、遠くで雨戸を繰る響、臺所をばた／＼二三度行交ひする音を聞きながら、やがて洗ひ果てて又浴びたが、湯の設計は、此の邸に似ず古びて居た。

小灯の朦々と包まれた湯氣の中から、突然禪のなりで、下駄がけで出ると、颯と風の通る庇間に月が見えた。廂はづれに覗いただけで、影さす程にはあらねども、只見れば尊き光かな、裸身に颯と白銀を鏝つたやうに二の腕あたり蒼すんだ。

思はず打仰いで、

「あゝ、お妙さん。」
俯向いた肩がふるへて、

「お蔭！」

蹠跟いたやうに母屋の羽目に凭れた時、

「早瀬さん」と、つい臺所に、派手やかな夫人の聲で、

「貴下、上つたら、此れにお着換へなさいよ。爰に置いときますから、」

「憚り、」

と我に返つて、上つて見ると、薄べりを敷いた上に、浴衣がある。琉球紬の書生羽織が添へてあつたが、それには及ばぬから浴衣だけ取つて手を通すと、裾短に腕が出て着心の變な事は、引上げて、引上げて、裾が摺るのを、引縮めて部屋へ戻ると……道理こそ婦物の中形模様の媚かしいのに、藍の香が芬とする。突立つて見て居ると、夫人は中腰に膝を支いて、鐵瓶を掛けたら、

「似合つたでせう、過日谷屋が持つて來て、貴下が見立てて下すつたのを、直ぐ仕立てさしたのよ。島山のは未だ縫へないし、あるのは古いから、我慢して寝衣に着て頂戴。」

「むざ／＼新らしいのを。」

と主税は袖を引張る。

「否、私、今着て見たの、お初ではありません。御遠慮なく、でも、お氣味が悪くはなかつて。」

一寸着たから、

「氣味が悪い、」

「……」

「もんですか。勿體至極もござらん。」

と極つたが、何か未だ物足りない。

「帯ですか。」

「然やう、」

「これを上げませう。」

とすつと立つて、上緊をするりと手繰つた、麻の葉紋の絹縮。

「……」

目を見合せ、

「可いわ、」

とはたと疊に落して、

「私も一風呂入つて來ませう。今の内に。」

主税はあとで座敷を出て、縁側を、十疊の客室の前から、玄關の横手あたりまで、行つたり來

たり、や、寢音のするまで歩行いた。

婢が来て、ぬいと立つて、

「夫人が言ひましけえ、お涼みなさりますなら雨戸を開けるでござります。」

「否、宜しい。」

「はい。」と念入りに返事する。

「何時も何時頃にお休みだい。」

と親しげに問ひかけながら、口不重寶な返事は待たずに、長火鉢の傍へ、つか／＼と歸つて、

紙入の中をざつくりと摺んだ。

疾い事、最う紙に兩個。

「一個は乳母さんに、お前さんから、夫人に云はんのだよ。」

十七

寝たのは彼是一時。

膳は片附いて、火鉢の火の白いのが果敢ないほど、夜も更けて、寂と寒くなつたが、話に實が入つたのと、最う寢よう、最う寢ようで炭も繼がず。それでも火の氣が便りだから、横坐りに、

襖を引合せて肩で押して、灰の中へ露はな肱も落ちるまで、火鉢の縁に凭れかゝつて、小豆ほどな火を拾ふ。……湯上りの上、晝間歩き廻つた疲れが出た昔子は、髪も衣紋も、帯も姿も萎えたやうで、顔だけは、ほんのりした——麥酒は苦くて嫌ひ、と葡萄酒を硝子杯に二ツばかりの——酔さへ醒めず、黒目は大きく睫毛が開いて、艶やかに濕つて、唇の紅が濡れ輝く。手足は冷えたらうと思ふまで、頭に氣が籠つた様子で、相互の話を留めないのを、餘り晩くなつては、又御家來衆が、變にでも思ふと不可ませんから、と其こそ、人に聞えたら變に思はれさうな事を、早瀬が云つて、其れでも夫人の未だ話し飽かないのを、幾度促しても肯入れなかつたが……火鉢で隔てて、柔かく乗出して居た肩の、衣の裏がするりと這つた時、薄寒さうに、が／＼と頷くと見ると、早急にフイと立つ……。

膝に搦んだ裳が落ちて、蹠跟めく袖が、はらりと、茶棚の傍の襖に當つた。肩を引いて、胸を反らして、おつくらしく、身體で開けるやうにして、次室へ入る。

板廊下を一つ隔てて、其處に四疊半があるのに、床が敷いてあつて、小兒が二人背中合せに枕して、真中に透いた處がある。乳母が兩方を向いて寝かし附けたらしいが、熱く寢入つて居て、乳母は居なかつた。

ト其處を通り越して、見えなく成つた切、襖も閉めないで置きながら、夫人は頃刻經つても來

なかつた。

早瀬は灰に突込んだ堆い菴蓐の吸殻を視めながら、あ、喫んだと思ひ、あ、饒舌つたと考へる。

其の話、と云ふのが、豫て約束の、あの、ギョウテの(エルテル)を直譯的にと云ふ註文で、傳へ聞く彼の大詩聖は、或時シルレルと葡萄の杯を合せて、予等が詩、年を経るに従ひて愈貴からむこと斯の酒の如くならむ、と誓つたさうだわね、と硝子杯を火に翳して其の血汐の如き紅を眉に宿して、大した學者でせう、などと夫人、得意であつたが、お酌が柳橋のでなくつては、と云ふ機掛から、エルテルは後日にして、まあ、題も(ハヤセ)と云ふのを是非聞かして下さい、酒井さんの御意見で、お別れなすつた事は、東京で兄にも聞きました、戀人は何うなさいました。厭だわ、聞かさなくつちや、と強ひられた。

早瀬は悉く懺悔するが如く語つたが、都合上、爰では要を摘んで置く。……
義理から別離話に成ると、お蔭は、しかし二度藝者をする氣は無いから、幸ひめ組の惣助の女房は、島田が名人の女髪結。柳橋は廻り場で、自分も結つて貰つて懇意だし、め組とは又あ、云ふ中で、打明話が出来から、一層其の弟子に成つて髪結で身を立てる。商賣をひいてからは、いつも獨りで束ねるが、銀杏返しなら不自由はなし、雛妓の桃割ぐらゐるは慰みに結つて遣つて、

お世辭にも譽められた覺えがある。出来ないことはありますまい、親もなし、兄弟もなし、行く處と云へば元の柳橋の主人の内、それよりは肴屋へ内弟子に入つて當分梳手を手傳ひませう。……何も心まかせ、と其に極まつた。此の事は、酒井先生も御承知で、内證で飯田町の二階で、直に、お蔭に逢つて下さつて、其の志の殊勝なのに、つくづく頷いて、手づから、小遣など、いろく心着があつた、と云ふ。

其切、顔も見ないで、静岡へ引込むつもりだつたが、め組の惣助の計らひで、不意に汽車の中で逢つて、横濱まで送る、と云ふのであつた。處が終列車で、濱が留まりだつたから、旅籠も人目を憚つて、場末の野毛の目立たない内へ一晩泊つた。

(そんな時は)

と酔つて居た夫人が口を挟んで、顔を見て笑つたので、しばらくして、

(背中合はせて、別々に。)

翌日、平沼から急行列車に乗り込んで、而して夫人に逢つたんだと。……

うつら〜

中途で談話に引入れられて鬱ぐくらる、同情もしたが、藝者なんか、眞個にお止しなさいよ、と夫人が云ふ。主税は、當初から酔はなきや話せないで陶然として居たが、然りながら夫人、日本廣しと雖も、私にお飯を炊てくれた婦は、お蔭の他ありません。母親の顔も知らないから、噫、と喟然として天井を仰いで歎するのを見て、誰が赤い顔をしてまで、貸家を聞いて上げました、と流眊にかけて、ツンとした時、失禮ながら、家で命は繋げません、貴女は御飯が炊けますまい。明日は炊くわ。米を煮るのだ、と笑つて、それから其へ花は咲いたのだつたが、しかし、氣の毒だ、可哀相に、と憐愍はしたけれども、徹頭徹尾、(藝者はおよしなさい)……此の後たとひ酒井さんのお許可が出ても、私が不承知よ。で、さて最う、夜が更けたのである。

出て来ない——夫人は何うしたらう。

がた／＼音がした臺所も、遠く成るまで寂寥して、耳馴れたれば今更めけど、戸外は數萬の蛙の聲。蛙、蛙、蛙、蛙と書いた文字に、一ツ／＼音があつて、天地に響くが如く、はた古戰場を記した文に、盡く調があつて、章と句と齊しく聲を放つて鳴くが如く、何となく雲が出て、白く移り行くに従つて、動搖を造つて、國が暗くなる氣勢がする。

時に湯氣の蒸した風呂と、庇合の月を思ふと、一生の道中記に、荒れた驛路の夜の孤旅が思出される。

渠は愁然として額を壓へた。

「何うぞお休み下さりまし。」

と例の俯向いた陰氣な風で、敷居越に乳母が手を支いた。

「いろ／＼お使ひ立てます。」

と直ぐにつつと立つて、

「何方ですか。」

「其處から、お座敷へ何うぞ……あの、先刻は又、」と頭を下げた。

寢床は其の、十疊の眞中に敷いてあつた。

枕許に水指と、硝子杯を伏せて盆がある。煙草盆を並べて、最う一つ、黒塗金蒔繪の小さな棚を飾つて、毛糸で編んだ紫陽花の青い花に、玉の丸火屋の殘燈を包むで載せて、中の棚に、香包を斜めに、古銅の香合が置いてあつて、下の臺へ鼻紙を。重しの代りに、女持の金時計が、底澄んで、キラ／＼星のやうに輝いて居た。

じろりと視めて、莞爾して、蒲團に乗ると、腰が沈む。天鵝絨の括枕を横へ取つて、足を伸して裙にかさねた、黄縞の郡内に、桃色の絹の肩當てした搔卷を引き寄せる、手が迂つて、ひやりと軽くかゝつた裏の羽二重が燃ゆるやう。

トタンに次の書齋で、する／＼と帯を解く音がしたので、未だ横に成らなかつた主税は、搔卷の襟に兩脇を支いた。

乳母が何か云つたやうだつたが、其は聞えないで、派手な夫人の聲して、

「あ、此のまゝ寝ようよ。何うせ臺なしなんだから。」

と云つたと思ふと、隔ての襖の左右より、中ほどがスーと開いたが、此方の十疊の京間は廣し、向うの灯も暗いから、裳はかくれて、乳の下の方が見えた。

「お休みなさい。」

「失禮。」

と云ふ。襖を閉めて肩を引いた。が、幻の花環一つ、黒髪のありし邊、宙に残つて、消えずに俤に立つ。

主税は仰向けに倒れたが、枕はしないで、兩手を廻して、緊乎と後腦を抱いた。目はハッキリと睜いて、失せやらぬ其の幻を視めて居た。時過ぎる、時過ぎる、其の時の過ぎる間に、乳母が長火鉢の處の、洋燈を消したのが知れて、しつこは、しつこは、と小兒に云ふのが聞えたが、やがて静まつて、時過ぎた。

早瀬は起上つて、棚の殘燈を取つて、縁へ出た。次の書齋を抜けると又北向きの縁で、其の突當りに、便所があるのだが、夫人が寝たから、大廻りに玄關へ出て、鞠子の寝た襦を通つて、板戸を開けて、臺所の片隅の扉から出て、小用を達して、手を洗つて、手拭を持つと、夫人が湯で使つたのを掛けたらしい、冷く手に觸つて、ほんのり白粉の香がする。

十九

寢室へ戻つて、何か思切つたやうな意氣込で、早瀬は勢よく枕して目を閉ぢたが、枕許の香は、包を開けても見ず、手拭の移香でもない。活々とした、何の花か、其薫の影はないが、透通つて、きら／＼、露を揺つて、幽な波を描いて戀を囁くかと思はれる一種微妙な匂が有つて、搔卷の袖を辿つて来て、和かに面を撫でる。

其を搔拂ふ如く、目の上を兩手で無慚に引擦ると、ものの香は濃と枕に遁げて、縁側の障子の隅へ、音も無く潜んだらしかつたが、又……有りもしない風を傳つて、引返して、今度は軽く胸に乗る。

寢返りを打てば、袖の煽にふつと拂はれて、やがて次の間と隔ての、襖の際に籠つた氣勢、原の花片に香が戻つて、匂は一處に集つたか、薫が一汐高く成つた。

快い、然りながら、強い刺戟を感じて、早瀬が寝られぬ目を開けると、先刻（お休みなさい。）

を云つた時、菅子が其處へ長襦袢の模様を残した、襖の中途の、人の丈の肩あたりに、幻の花環は、色が薄らいで、花も白澄んだけれども、未だ歴々と瞳に映る。

枕に手を支き、むつくり起きると、恰も其の花環の下、襖の合せ目の處に、残燈の隈か見え、薄紫に疊を染めて、例の堇色の手巾が、寂然として落ちたのに心着いた。

薫は扱は其からと、見る／＼、心ゆくばかりに思ふと、萌黄に敷いた疊の上に、一簇の堇が咲競つたやうに成つて、朦朧とした花環の中に、就中輪の大きい、目に立つ花の花片が、ひら／＼と動くや否や、立處に羽にかはつて、蝶々に化けて、瞳の黒い女の顔が、其の同一處にちら／＼する。

早瀬は、甘い、香しい、暖かな、とろりとした、春の野に横はる心地で、枕を逆に、搔卷の上へ寝巻の腹ん這に成つて、蒲團の裙に乗出しながら、頬杖を置いて、恍惚した狀に其の堇を見てゐる内、上にたゝすむ蝶々と齊しく、花の匂が懐しくなつたと見える。

徐ら、手を伸して紫の影を引くと、手巾は其のまゝ手に取れた。……が堇には根が有つて、襖の合せ目を離れない。

不思議に思つて、蝶々がする風情に、手で羽の如く手巾を揺動かすと、一寸ばかり襖が……開……い……た。

只見ると、手巾の片端に、紅の幻影が一條、柔かに結ばれて、夫人の鬨に、する／＼と繋つて居たのであつた。

堇が咲いて蝶の舞ふ、人の世の春の恁る折から、こんな處には、何時でも此の一條が落ちて居る、名づけて縁の糸と云ふ。禁斷の智慧の果實と齊しく、今も神の試みで、棄てて手に取らぬ者は神の兒となるし、取つて繋ぐものは惡魔の眷屬となり、畜生の淺猿しさとなる。是を夢みれば蝶となり、慕へば花となり、解けば美しき霞と成り、結べば恐しき蛇と成る。

如何に、此時。

隔ての襖が、より多く開いた。見る／＼朱き蛇は、其の燃ゆる色に黄金の鱗の紋を立てて、堇の花を搔潜つた尾に、主税の手首を巻きながら、頭に婦人の乳の下を紅見せて嚙んで居た。

颯と花環が消えると、横に枕した夫人の黒髪、後向きに、搔卷の襟を出た肩の邊が露に見えた。残燈は其の枕許にも差置いてあつたが、どちらの明でも、繋いだものの中は斷たれず。……

ぶる／＼震ふと、夫人はふいと衾を出て、胸を壓へて、熟と見据ゑた目に、閨の内を胸して、憎としたやうで、未だ覺めやらぬ夢に、堇咲く春の野を徜徉ふ如く、裳も疊に漾つたが、稍あつて、はじめて其の怪い扱帯の我を纏へるに心着いたか、あ、と忍び音に、魔された、目の美しい蝶の顔は、俯向けに堇の中へ落ちた。

妙子は同伴も無しに唯一人、學校がへりの態で、八丁堀の只ある路地へ入つて來た。

通ふ其の學校は、麴町邊であるが、何處を何う廻つたのか、眞砂町の嬢さんが此の邊へ來るのは、旅行をするやうなもので、野山を越えて遙々と……近所で濫習つて居る三味線も、旅の衣はすゞかけの、旅の衣はすゞかけの。

目で聞く如くばつちりと、其の黒目勝なのを睨つたお妙は、鶯の聲を見る時と同一な可愛い顔で、路地に立つて胸はしながら、橘に井げたの紋、堀の内講中のお札を並べた、上原と姓だけの門札を視めて、單衣の襟を一寸合はせて、すつと其の格子戸へ寄つて、横に立つて、洋傘を支いたが、聲を懸けようとしたらしく、斜めに覗き込んだ顔を赤らめて、黙つて俯向いて俯目に成つた。口許より睫毛が長く、日にさした影は小さく軒下に隠れた。

コト／＼と其の洋傘で、爪先の土を叩いて居たが、
「御免なさい。」

と漸々云ふ、控へ目だつたけれども、朗に清しい、框の障子越につつと透る。

中から能く似た、稍落着いた静な聲で、

「はあ、誰方？」

お妙は自分から調子が低く、今のは聞えない分に極めて居たのを、すぐの返事は、些と不意討と云ふ風で、吃驚して顔を上げる。

「誰方、」

「あの……髮結さんの内は此方でせうか。」

「はい、此方でございますが。」と座を立つた氣勢に連れて、もの云ふ調子が婀娜に成る。

と眞正面に内を透かして、格子戸に目を押附ける。

「何ぞ御用。」

と幾干か透いて居た障子をすらりと開ける。粹で、品の佳い、しつとりした縞お召に、黒縹子の丸帯した御新造風の圓鬘は、見違へるやうに質素だけれども、みどりの黒髪たくひなき、柳橋の小芳であつた。

立身で、框から外を見たが、こんな門には最明寺、思ひも寄らぬ令嬢風に、急いで支膝に成つて、

「生憎出掛けて居りませんが、貴嬢、何方様でいらつしやいますか。歸りましたら、直ぐ上りますやうに申しませう。」

瞳も離さないで視めたお妙が、後馳せに會釋して、

「然う、でも、あの、誰方かおいでせう。内へ來て貰ふんぢやないの。私が結つて欲しいのよ。どうせ、こんなのですから、」

と指でも壓へず、惜氣なく束髮の鬢を掉つて、

「お師匠さんで無くつても可いんです。お弟子さんがお在なら、一寸結んで下さいな。」

縋つて頼むやうに仇なく云つて、しつかり格子に掴まつて、差覗きながら、

「小母さんでも可いわ。」

我を（小母さん）にして髪を結つて、と云はれたので、我ながら忘れたやうに、心から美しい笑顔に成つて、

「貴嬢、まあ、どちらから。あの、御近所でいらつしやいますか。」

「否、遠いのよ。」

「お遠うございますか。」

「本郷だわ。」

「え、」

「私ねえ、本郷のねえ、酒井と云ふの。」

「お嬢様、まあ、」

と土間に一足おろしさまに、小芳は、急いで框から開ける手が、戸に掴まつたお妙の指を、中から壓へたのも氣が附かぬか、駒下駄の先を、逆に半分踏まへて、片袂蹴出しのみだれさへ、忘れたやうに瞻つて、

「お妙様。」

「小母さんは、早瀬さんの……あの……お薦さん？」

二十一

「入らつしやいまし、」

と小芳が太く更まつて、三指を突いた時、お妙は窮屈さうに六疊の上座へ直されて居たのである。

「貴嬢、まあ、何うしてこんな處へ、唯た御一人なんですか。途中で何かございませんでしたか、お暑かつたでせうのに。唯今手拭を絞つて差上げます。」

と一齊に云ひかけられて、袖で胸を煽いで居た手を留めて、

「暑いんぢやないの、私極が悪いから、それで以て、あの、」

と袂を顔に當てて、鈴のやうな目ばかり出して、

「小母さんが、お薦さん？」と低聲で又聞いた。

「あれ、何うしませう。餘り思懸けない方がお見えなさいましたもんですから、私は狼狽て了つ

てさ。ほ、ほ、いふことも前後に成るんですもの、まあ、御免なさいまし。

私は……ぢやありません。其の……何でございますよ、お薦さんが煩らつて寝て居りますので、

見舞に來たんでございます。

「え、御病氣。」と憂慮しげに打傾く。

「はあ、久しい間、」

「澤山、悪くつて？」

「否、そんなでも無いやうですけど、臥つて居りますから、お髪はあげられませんがせう。ですが、御緩くり、まあ、なさいまし。此の頃では、お増さんも氣に掛けて、早く歸つて参りますから、眞個に……お嬢さん、」

と擦寄つて、うつかりと見惚れて居る。

上櫃が三疊で、直ぐ次が此の六疊。前の縁が折曲つた處に、最う一室、障子は眞中で開いて居たが、閉つた蔭に、床があれば有るらしい。

向うは餘所の藏で行詰つたが、所謂猫の額ほどは庭も在つて、青いものも少しは見える。小綺

麗さは、酔だくれには過ぎたりと雖も、お増と云ふ女房の腕で、疊も蒼い。上原とあつた門札こ

そ、世を忍ぶ假の名でも何でもない、即ち是れ組の住居、實は女髪結お増の家と云つて然るべ

きであらう。

惣助の得意先は、皆、渠を稱して恩田百姓と呼ぶ。註に不及、作取りの唯儲け、商賣で儲ける

だけは、飲むも可し、打つも可し、買ふも可しだが、何が扱其で濟まうか。儲けを飲んで、資本

で買つて、其から女房の衣服で打つ。

それお株がはじまつた、と見ると、女房はがち／＼と在りたけの身上へ鏡をおろして、鍵

を晝夜帯へ突込んで、當分商賣は爲せません、と仕事に出る、

トかますの煙草入に湯錢も無い。おなまめだんぶつ、座敷牢だ、と火鉢の前に縮まつて、下げ

煙管の投首が、或時悪心増長して、鐵瓶を引外づし、沸立つた湯を流へあけて、溝の湯氣の消え

ぬ間に、笹蕎麥で一杯を極めた。

當時女房に勘當されたが、漸とよりが戻つて以來、金目な物は重箱まで残らず出入先へ預けた

から、家には似ない調度の疎末さ。何處を見てもがらんとして、間狭な内には結句薩張して可さ
さうなが、お妙は目を外らす壁張りの繪も無いので、連に袂を爪操つて、
「可いのよ、小母さん、髪結さんの許だから、極りが悪いから然う云つて来たけれど、髪なんぞ
結はなくつたつて構はなくつてよ。些とも私、結ひたくはないの、」
と投出したやうに云つて、

「早瀬さんの、あの、主税さんの奥さんに、私、お目にかゝれなくつて？」

「姉さん、」

ト、障子の内から。

「あい、」と小芳が立構へで、縁へ振向いて其方を見込むと、

「私、其處へ行つても可いかい？」

小芳が急いで縁づたひで、障子に向うへ押しながら、膝を敷居越に枕許。

枕についた肩細く、半ば搔卷を藻脱けた姿の、空蟬のあはれな胸を、瘦せた手でしつかりと、
浴衣に襲ねた寝衣の襟の、はだかつたのを切なさうに掴みながら、銀杏返しの鬢の崩れを、引結
へた頭重げに、透通るやうに色の白い、鼻筋の通つた顔を、がつくりと肩につけて、吻と今呼吸
をしたのはお蔭である。

二十二

お蔭は急に起上つた身體のあがきで、寢床に添つた押入の暗い方へ顔の向いたを、此方へ見返
すさへ術なさうであつた。

枕から透く、其の細う振れた背へ、小芳が、密と手を入れて、上へ抱起すやうにして、
「切なくはないかい、お蔭さん、起きられるかい、お前さん、無理をしては不可いよ。」

「あゝ、難有う、」

と漸々起直つて、顛巻を取ると、あはれなほど振りかゝる後れ毛を搔上げながら、
「何だか、骨が抜けたやうで可笑いわ、氣障だねえ、ぐつたりして。」

と蓮葉に云つて、口惜しさうに力のない膝を緊め合はせる。

お妙は最う六疊の縁へ立つて来て、障子に掴まつて覗いて居たが、
「寝ていらつしやいよ、よう、然うしてお在なさいよ。私が其處へ行つてよ。」

と其まで遠慮したらしかつたが、さあと成ると、翻然と縁を切つて走込むばかりの勢——小芳
の方が一目先へ御見の濟んだ馴染だけ、此の方が便りになつたか、薄くお太鼓に結んだ黒袴子の
其の帯へ、擦着くやうに坐つて、袖のわきから顔だけ出して、はじめて逢つたお蔭の顔を、瞬も

しないで凝と視める。

肩を落して、お薦が蒲團の外へ出ようとすると、

「よう、然うしていらつしやいなね。そんなにして、私は困るわ。」

「はじめまして、」

と餘り白くて、血の通るのは覺束ない頸を下げて、手を支きつつ、

「失禮でございますから、」

「よう、私困るのよ。寝て居て下さらなくつては。小母さん、然う云つて下さいな。」

と氣を揉んで、我を忘れて、小芳の背中を丁々と叩いて、取次げ、と急つて云ふ。

其の優しさが身に浸みか、お薦の手を緊乎握つた、小芳の指も震へつつ、

「お薦さん、可いから寝ておいな、お嬢さんがあんなに云つて下さるからさ。」

「否、そんなぢやありません。切なければ直きに寝ますよ。お嬢さん、難有う存じます。貴嬢、

よくおいで下さいましたのね。」

「而して、よく家が知れましたわね。此の邊へは、滅多においでなさいましたことはござんせん

でせうにねえ。」

小芳は又今更感心したやうに熟々云つた。

「はあ、分らなくつてね。私、方々で聞いて極りが悪かつたわ。探すのさへ煩かしいんですもの。何だか、あの、小母さんたちは、一寸は、あの、逢つて下さらなからうと思つて、私、心配つたら無かつてよ。」

「私たちが……」

「何爲でございますえ。」

と兩方へ身を開いて、お妙を真中にして左右から、珍らしさうに顔を見ると、俯向きながら打

微笑み、

「だつて私は、些ともお金子が無いんですもの。お茶屋へ行つて、呼ばなくつては逢へないのぢ

やありませんか。」

お薦がハツと吐息をつくつと、小芳は故と笑ひながら、

「怪我にもそんな事があるもんですか。其に、お薦さんも、最う堅氣です。私が、何も……あの、

尤も、私に逢はうとおつしやつて下さつたのではござんせんが、」

と何爲か、怨めしさうな、然も優しい目で瞻つて、

「私は何も、そんな者ぢやありませんのに。」

「厭よ、小母さん、私兩方とも寫眞で見知つて居てよ。」

と仇氣なく、小芳の肩へ手を掛けて、前髪を推込むばかり、額をつけて顔を隠した。

二人目と目を見合せて、

「極が悪い、お蔭さん。」

「姉さん、私は恥かしい。」

「最……」

「あ、」

思はず一所に同音に云つた。

「寫真なんか撮るまいよ、——と。」

二十三

お妙は時に、小芳の背後で、内證で袂を覗いて居たが、細い紙に包んだものを出して氣兼ねさうに、

「小母さん、あの、お蔭さんが煩らつていらつしやる事は、私は知らなかつたんですから、お見舞ぢやないの、あのね、あの、お土産に、私、極が悪いわ。何にも有りませんから、毛糸で何か編んで上げようと思つたのよ。」

だけれども何が可いか、些とも分らないでせう。粹な藝者衆だから、ハイカラなものとは不可いでせう。靴足袋も、手袋も、銀貨入も、そんなものぢや仕方が無いから、是をね、私、極が悪いけれども持つて来ました。小母さんから上げて頂戴。」

「お喜びなさいよ、お嬢さんが、」

「まあ、」

と嬉しさうに頂くのを、小芳は見い、蒲團へ膝を乗懸けて、

「何を下さつたい。」

「開けて見ても可いかね。」

「早く拜見おしなねえ。」

「あら！見ちや可厭よ、酷いわ、小母さんは。」

と背中へ推着いて、唯た今まで味方に頼んだのを、最う目の敵にして、小突く。

お蔭は病氣で氣も弱つて、

「遠慮しませうかね、と柔順しく膝の上へ大事に置く。」

「眞個に、お蔭さんは羨しいわね。」

と然も羨しさうに小芳が云ふと、お妙はフト打仰向いて、目を大きくして何か考へるやうだつ

だが、最う一つの袂から緋天鵝絨の小さな蝦蟇口を可愛らしく引出して、
「小母さん、是を上げませう。怒つちや可厭よ。澤山あると可いけれど、大な銀貨(五十錢)が三
個だけだわ。」

先の紙入の時は、お紙幣が……然うねえ……あの、四圓ばかりあつたのに、此間落してねえ。」
と驚いたやうな顔をして、

「何うしようかと思つたの。だから些とばかりしかしただけれど、小母さん怒らないで取つといて下さい
な。」

小芳が吃驚したらしい顔を、お蔭は振上げた目で屹と見て、

「あゝ、先生のお嬢さん。……とも……角も……頂戴おしよ、姉さん、」

「お禮を申し上げます。」

と作法正しく、手を支いたが、柳の髪品の佳さ。頭も得上げず、聲が曇つて、

「何うぞ、此金で、苦界が抜けられますやうに。」

爾時お蔭も、いもと假名書の包みを開けて、元氣よく發奮んだ調子で、

「おゝ、半襟を……姉さん、江戸紫の。」

「主税さんが好きな色よ。」

と喜ばれたのを嬉しげに、はじめて膝を横にすらして、蒲團にお妙が袖をかけた。

「姉さん、」

と、お蔭は俯向いた小芳を起して、膝突合はせて居直つたが、頬を薄蒼う染るまで其の半襟を
咽喉に當てて、頗深く熱と壓へた、浴衣に映る紫榮えて、血を吐く胸の美しさよ。

「私が死んだら、姉さん、經帷子も何にも要らない、お嬢さんに頂いた、此の半襟を掛けさして

おくれよ、頼んだよ。」

と云ふ下から、桔梗を走る露に似て、玉か、はらくと襟を走る。

「えゝ、お前さん、そんな、まあ、拗ねたやうな事をお言ひでない。お嬢さんのお志、私、私
なんざ、今頂いた御祝儀を資本にして、銀行を建てるんです。而して借金を返してね、綺麗に藝
者を止すんだよ。」

と申戯らしく言ひながら、果敢ないお蔭の姿につけ、情にもろく崩折れつつ、お妙を中に面を
背けて、紛らす煙草の煙も無かつた。

小芳の心中、兎も角も、お蔭の頼み少ない風情は、お妙にも見て取られて、睫毛を幽に振はし
つつ、

「お賢者には懸つて居るの。」

「否、私も其の意見をして居た處でござんすよ。お医者様にも碌に診て貰はないで、薬も嫌ひで飲まないんですもの、貴女からも然う云つて遣つて下さいましな。」
と、はじめて煙草盆から一服吸つて、小芳はお妙の聲を聞くのを、楽しさうに待つ顔色。

お取膳

二十四

爾時お妙の言と云ふのが、餘り案外であつたのから、小芳は慌しく銀の小さな吸口を拂いて煙管を棄てたのである。

「お医者もお薬も、私だつて大嫌ひだわ。」
と至つて眞面目で、

「まづいものを内服せて、而してお菓子を食べては悪いの、林檎を食べては不可い、と種々なことを云ふんですもの。」

そんな事よりねえ、面白いことをしてお遊びなさいよ。」
小芳が（まあ。）と云ふ體で呆れると、お薦は寂しさうな笑を見せて、

「お嬢さん、其の貴嬢、面白いことが無いんですもの、と勢のない呼吸をする。

「主税さんに逢へば可いでせう。」

「え、」

「貴女、逢ひたいでせう。」

二人が黙つて瞻つても、お妙は目まじろぎもしないで、

「私だつて逢ひたくつてよ。静岡へ行つてから、全く一年に成るんですもの、随分だと思ふわ、手紙も寄越さないんですもの。私は、餘りだと思つてよ。」

繪のお清書をする時、硯を洗つてくれて、而して其の晩別れたのは、丁ど今月ぢやありませんか。其時の杜若なんざ、最う私、嬰兒が描いたやうに思ふんですよ。随分しばらくなんですもの、私だつて逢ひたいわ。」

と見る／＼瞳にうるみを持つたが、活々した顔は撓まず、聲も凛々と冴えた。

「それですから、貴女も逢ひたからうと思つてねえ。實は私相談に來たの。最と早くから、來よう、來ようと思つたんだけれど、極が悪いしねえ、其に私見たやうなものには逢つて下さらないでせうと思つて、學校の歸りに幾度も九段まで來て止したの。」

それでも、あの、築地から來るお友達に、此の邊の事を聞いて置いて、九段から、電車に乗る

のは分つたの。だけでもねえ、一度萬世橋で降りて了つて、來られなくなつた事があるのよ。

其のお友達と一所に來ると、新富座の處まで教へて上げませうツて云ふんだけれど、學校で又何か言はれると悪いから、今日も同一電車に乗らないやうに、招魂社の中にしばらく居たら、男の書生さんが傍へ來て附着いて歩行くんですもの。私、斬られるかと思つて可恐かつたわ、ねえ、お臀の肉が藥に成ると云ふんでせう、ですもの、危いわ。

最う一生懸命に此處へ來て、まあ、可かつた、と思つてよ。

あのね、あの、

と尊の綴絲を引張つて、

「貴女も主税さんも、父さんに叱られて其で恚うして居るんだつて、可哀相だわ。私なら黙つちや居ないわ、我儘を云つて遣るわ。だつて、自分だつて、母様が不可ないと云ふお酒を飲んで仕様が無いんですもの。自分も悪いのよ。」

貴女叱られたら、おあやまんないよ。而してね、父さんはね、私や母様の云ふ事は、其は、憎らしくつてよ、些とも肯かないけれど、人が來て頼むとねえ、何でも(厭だ)とは言はないで、一々引受けるの。私ちやんと傳授を知つて居るから、其を知らせて上げたいの、貴女が御病氣で來られないんなら、小母さん、

と隔てなく、小芳の膝に手を置いて、

「小母さんでも可うござんす。構はないで家へ入らつしやいよ。玄關の書生さんは婦のお客様をじろく見るから極が悪かつたら遠慮は無いわ、すんく庭の方から來らつしやい。」

私かね、直ぐに二階へ連れてつて、上げるわ。然うするとねえ、母様がお酒を出すでせう。私がお酌をして酔はせてよ。アハア笑つて、ブンと響くやうな大な聲を出したら、而したら最う可いわ。

是非、主税さんを呼んで下さい。電報で——電報と云つて頂戴、可くつて。不可いとか何とか、父さんが然う云つたら、膝をつかまへて離さないの。而して、お薦さんが寂しがつて、こんなに煩らつていらつしやると云つて御覽なさい。あんなに可恐らしくつても、あはれな話だと直きに泣くんですもの、屹と承知するわ。

其のかはり、主税さんが歸つて來たら、日曜に遊びに行くから、而うしたらば、あの……」

と尊の端につかまつて、お薦の顔を覗くやうにして、
「貴女も、私を可厭がらないで、一所に遊んで頂戴よ。前に飯田町に行きたくつても、貴女が隠れるから、どんなに遠慮だつたか知れないわ。」

最う二人とも泣いて居たが、お薦は、はツと面を伏せた。

涙を拂つて、お蔭が、

「姉さん、私は浮世に未練が出た。又生命が惜くなつたよ。皆さんに心配を懸けないで、今日からお醫師にも懸りませう、薬も服むよ。」

お嬢さん、最う早瀬さんには逢へなくつても、貴女がお達者でいらつしやいます内は、死にたくはなくなりまして。

と身を切めて、わな／＼震へる。

「寒氣がするのねえ、さあ、お寝なさいよ、私が掛けて上げませう。」
搔卷の襟へ惜氣もなく、お妙が袖も手も入れて引くのを見て、

「あゝ、勿體ない。そんなに被成つては不可ません。皆が然うぢや無いつて言ひますけれど、私は色のついた痰を吐きますから、大切なお身體に、もしか、感染でもすると成りません。」
「可いわ！」

「可いわではござんせん。あれ、而して寒氣なんぞしませんよ、最う私は熱くつて汗が出るやう

なんです、それから、姉さん、

と小芳を見て、

「何ぞ……」

と云ふと、黙つて頷く。

「來たらね、こんな處でなく、彼方へ行つて、お前さん、お嬢さんと。」

「今日は私に任かせておくれ。」

「否、」

「不可ないよ、私がするんだよ。」

「お嬢さん、あゝですもの。見舞に來て、一寸、病人を苛めるものがあつて、」

「無理ばかり云ふ人だよ、私に理由があるんだから。」

「理由は私にだつて有りますよ。あの、過般もお前さんに話したらう。早瀬さんと分れて、恠う成る時、煙草を買へ、とおつしやつて、先生の下すつた、其はね、折目のつかない十圓紙幣が三枚。勿體ないから、死んだらお葬式に使つて欲しくつて、お佛壇の抽斗へ紙に包んでしまつてある、其を今日使ひたいのよ。お嬢さんに差上げて、而して私も食べたいから、」
と唯言ふのさへ病人だけ、遺言のやうに果敢なく聞えた。

「あゝ、そんなら然うおしな。どれ、大急ぎで、いひつけよう。」

「戸外は暑からうねえ。」

「何の、お薦さん。お嬢さんに上げるんだもの、無理にも洋傘をさすものか。」

「角の小間物屋で電話をお借りよ。」

「あゝ、知つてるよ。餘りあらくない中くらのな處が好からうねえ。」

「私はヤケに大串が可いけれど、お嬢さんは、」

「此處で皆一所に食べるんでなくつちや、厭。」

「お相伴しますとも、お取膳とやらで、」

「と小芳が嬉しさに云ふ。

「ぢや、私も大きいの。」

「感心、」

「とお薦が莞爾。

「驚きましたねえ。」

「と立つ。

「御飯も一所よ。」

「あいよ、」

と框を下りる時、褌を取りさうにして、振向いた目のふちが腫ぼつたく、小芳は胸を抱いて、

格子をがら〜。

「お嬢さん、」

とお薦が懐しさに、

「もと〜、然う云ふ約束で別れたんですけれど、私の方へも丸一年……些とも便がないんです

よ。

人が教へてくれましたしてね、新聞を見ると、すっかり土地の様子が知れるツて言ひますから、去年の七月から静岡の民友新聞と云ふのを取りましてね、朝起きると直ぐ覗いて、もう見落しはしなからうか、と隙さへあれば、廣告まで読みますんですが、些とも早瀬さんの事を書いてあつたことはありませんから、何うしてお在でだか分りません。

此頃ぢや落膽して、勢も張合も無いんですけれども、もしやにひかされては見居ます。

唯た一度、早瀬さんのことを書いてあつたのがござんしてね、切抜いて紙入の中へ入れてありますから、今、お目に掛けますよ。」

お蔭は尊に居直つて、押入の戸を右に開ける、と上も下も佛壇で、一ツは當家の。自分でお蔭
が守をするのは同居だけに下に在る。それも何となくものはれただけけれども、後姿が褌の萎えた、
かよわい状は、物語にでもあるやうな。直ぐに其の裳から、佛壇の中へ消えさうに腰が細く、撫
肩がしをれて、影が薄い。

紙入の中は、しばらく指の尖で搔探さねば成らなかつたほど、可哀相に大切に藏つて、小さく、
整然と疊んで、濱町の清正公の出世開運のお札と一所にしてあつた、其の新聞の切抜を出す、と
お妙は早や隔心も無く、十年の馴染のやうに、横ざまに尊に凭れながら、頸を伸して、待構へて、
「一寸、どんなことが書いてあつて。又拘賊を助けたりなんか、不可ないことをしたのぢやない
の。急いで聞かして頂戴な。」

「否、まあ、貴女がお読みなさいまし。」
「拜見な。」

と寝轉ぶやうにして、頬杖ついて、疊の上で讀むのを見ながら、抜きかけた、佛壇の抽斗を覗
くと、其處に仰向けにしてある主税の寫眞を密と見て、ほろりとしながら、カタリと閉めた。懐

中へ、其の酒井先生恩賜の紙幣の紙包を取つて、佛壇の中に落ちた線香立ての灰を、フツフツと
吹いて、手で撫でる。

戸外を金魚賣が通つた。

「何でせう。此の小使は、又可訝なものぢやないの、」

とお妙が顔を赤うして云ふ。新聞に書いたのは（A B 横町）と云ふ標題で、西の草深のはづれ、
浅間に寄つた、最う郡部に成らうとする唯ある小路を、近頃渾名して「B 横町」と稱へる。既に阿
部郡であるのだから語呂が合ひ過ぎるけれども、是は獨語學者早瀬主税氏が、爰に私塾を開いて、
朝から其の聲の絶間のない處から、學生が戯に爾か名づけたのが、一般に擴まつて、豆腐屋まで
が「B 横町」と呼んで、土地の名物である。名物と云へば、最一ツ其の早瀬塾の若いもので、是が
煮焼、拭掃除、萬端世話をするのであるが、通例なら學僕と云ふ處、粹な兄哥で、鼻唄を唱へば
と云つても學問をするのでない。以前早瀬氏が東京で或學校に講師だつた、其處で知己の小使が、
便つて來たものださうだが、俳優の聲色が上手で落語も行く。時々（入らつしやい）と怒鳴つて、
下足に札を通して通學生を驚かす、飛だ愛敬もので、小使さん、小使さんと、有名な島山夫人を
はじめ、近頃流行のやうに成つて、獨逸語を其の横町に學ぶ貴婦人連が、大分御最員である、と
云ふ雑報の意味であつた。

小芳が、お、暑い、と云ひつつ、いそくと歸つて来た。
話に其の小使の事も交つて、何であらうと三人が風説とりくの中へ、へい、お待遠様、と来たのが竹葉。

小芳が火を起すと、氣取氣の無いお嬢さん、臺所へ土瓶を提げて出る。お蔭も勢に連れて蹠蹠起きて出て、自慢の番茶の焙じ加減で、三人睦くお取膳。

お妙が奈良漬にほうと成つた、顔がほてるのと洗つたので、小芳が刷毛を持つて、颯とお化粧を直すと、お蔭がぐい、と櫛を拭いて一齒入れる。

苦勞人が二人がかりで、妙子は品のいゝ處へ粹に成つて、又あるまじき美麗さを、飽かず視めて、小芳が幾度も恍惚氣抜けのするやうなのを、あゝ、先生に瓜二つ、御尤もな次第だけれども、餘り手放して口惜いから、あとでいぢめて遣らう、とお蔭が思ひ設けたが、……あゝ、然りとては……

いづれ兩親には内證なんだから、と（おいしかつてよ。）を見得もなく門口でまで云つて、遅くならない内、お妙は八ツ下りに歸つた。路地の角まで見送つて、やゝあつて引返した小芳が、ばたくと駈込んで、半狂亂に、袴と、お蔭に縋りついて、

「我慢が出来ない。我慢が出来ない。我慢が出来ない。あんな可愛いお嬢さんにお育てなすつた

お手柄は、眞砂町の夫人だけれど、産産んだのは私だよ。私の子だよ、お蔭さん、身體へ袖が觸る度に、胸がうづいて成らなんだ、御覽よ、乳のはつたこと。」

と、手を引入れて引緊めて、わつとばかりに聲を立てると、思はず熱と抱き合つて、

「あれ、確乎おし、小芳さん、癩が起ると不可いよ。私たちは何の因果で、」
藝者なんぞに成つたとて、色も諸分も知抜いた、いづれ名取の婦ども、處女のやうに泣いたのである。

小待合

二十七

婦系圖

「恚うく、姉え、姉え、目を開いて口をききねえ。尤も、くわつと開いた處で、富士も筑波も見えるか何うだか、覺束ねえ目だけれどよ。は、は、いくら江戸前の肴屋だつて、玄關から怒鳴り込む奴があるかい。お客だぜ。お客様だぜ。おい、お前の方で惣茶は要らなくつても、己が方で座敷が要るんだ。何を！座敷が無え、古風な事を言ふな、藝者の霜枯ぢやあるめえし。」
と盤臺をどさりと横づけに、澄まして天秤を立てかける。微酔のめ組の惣助。商賣の歸途に又

ぐれた——是だから女房が、内には鐵瓶さへ置かないのである。
立迎へた小待合の女中は、坐りもやらす中腰でうろ／＼して、
「全くお生憎なんですよ。」

と入口を塞いだ前へ、平氣で、づんと腰を下ろして、

「見ねえ、身もんでえをする度に、どんぶりが鳴らあ。腹の蟲が泣くんぢやねえ、金子の音だ。
びく／＼するねえ。お望みとありや、千兩束で足の埃を拂いて通るぜ。」

とあげ膝で、ボコボン靴をずりと脱いで、装鹽の此方へボカン。

聲が高いので最う一人、奥からばた／＼と女中が出て来て、推重なると、力を得たらしく以前の女中が、

「眞個にお前さん、お座敷が無いのですよ。」

「看板を下ろせ、

と喚いて、

「座敷がなくば押入へ案内しねえ、天井だつて用は足りらい。やあ、御新規お一人様あ、

と尻上りに云つて、外道面の口を失らす、相好鹽吹の面の如し。

「其方の姉は話せさうだな。うんや、矢張りお座敷ござなく面だ。變な面だな。は、は、トお

つしやる方が、餘り變でもねえ面でもねえ。」

行詰つた鼻の下へ、握拳を捻込むやうに引擦つて、

「憚んながら恚う見えても、餘所行き的情婦があるぜ。待合へ来て見繕ひで拵えるやうな、べら
ぼうな長生をするもんかい。」

おう、八丁堀のめの字が来たが、の、の、承知か、承知か、と電話を掛けねえ。柳橋の小芳さ
ん許だ。柏屋の綱次と云ふ美しいのが、忽然として顯れらあ。

何うだ、驚いたか。銀行の頭取が香屋に化けて来たのよ。いよ、御趣向！
と變な手つき、にうと女中の鼻頭へ突出して、

「それとも半纏着は看板に障るから上げねえ、とでも吐かして見る。河岸から鯨を背負つて来て、
汝ん許で泳がせるぞ、濱町界限洪水だ。地震より恐怖え、屋體骨は浮上るぜ。」

女中二人が目配せして、

「とも角お上んなさいまし、」

「何うにか致しますから。」

「何だ、何うにかする。格子で馴染を引くやうな、氣障な事を言やあがる。だが心底は見届けた
よ。いや、御案内引。」

と黄聲を發して、どさり、と廊下の壁に打附りながら、
「何處だ、何處だ、さあ、持つて來い、座敷を。」
で、突立つて大手を擴げる。

「何うぞ此方へ、」

と廊下で別れて、一人が折曲つて二階へ上る後から、どしどし亂入。只ある六疊へのめすり込
むと、蒲團も待たず、半股引の薄汚れたので大胡坐。

「御酒をあげりますか。」

「何升お燗をしますか、と聞きねえ。仕入れてあるんぢや追つくめえ。」

女中が苦笑ひして立たうとすると、長々と手を伸ばして、据眼で首を振つて、チヨ、舌鼓を打
つて、

「待ちなく。大夫前藝と仕つて、一ツ瀧の水を走らせる、」

とふいと立つて、

「鷺尾の三郎案内致せ。鴨越の逆落しと遣れ。裏階子から便所だ、便所だ。」

何處の夜講で聞いたさうな。

二十八

手水鉢の處へめ組はのつそり。里心のついた振られ客のやうな腰附で、中庭越に下座敷をきよ
ろくと向したが、何處へ何んと見當附けたか、案内も待たず、元の二階へも戻らないで、唯あ
る一室へのつそりと入つて、襖際へ、どさりと又胡坐に成る。

女中が慌しく駈込んで、

「まあ、何處へ入らつしやるんですか。」

と、たしなめるやうに云ふと、

「此處にいらつしやら。は、は、心配するな。」

「困りますよ。隣のお座敷には、お客様が有るぢやありませんか。」

「構はねえ、一向構はねえ。」

「此方がお構ひなさいませんでも、彼方様で。」

「可いぢやねえか、お互だ。此んな處へ來て何も、向う様だつて遠慮はねえ。大家様の隠居殿の
葬禮に立つとつてよ、町内が質屋で打附つたやうなものだ。一ツ穴の狐たい。己あ又、猫のさか
るやうな高い處は厭だからよ。勘當された息子ぢやねえが、二階で寝ると魔されらあ。身分相當

割床と遣るんだ。棟割に住んでるから、壁隣の賑かなのが頼もしいや。」

「不可ませんよ、そんなことをお言ひなすつちや、選好んで此のお座敷へ入らつしやらないだつて、幾らでも空いてるぢやありませんか。」

「空いてる！ 慥う、唯だ今座敷はねえ、お生憎だと云つたぢやねえか。氣障は言はねえ、氣障な事は云はねえから、黙つて早く爛けて來ねえよ。」

いひがかりに止むを得ず、厭な顔して、

「ぢや、御酒を上るだけになすつて下さいよ、お肴は？」

「肴は己が盤臺にあら。竹の皮に包んでな、斑鮭の鎌ノ處があるから、其奴を焼いて持つて來ねえ。蔦ちやんが好だつたんだが、此の節ぢや何にも食はねえや、折角残して歸つても今日も食ふめえ。」

と獨言に成つて、ぐつたりして、

「媽々に遣るんぢや張合が無え。焼いて來ねえ、焼いて來ねえ。」

女中は、氣違かど危んで、怪訝な顔をしたが、試みに、

「而して綱次さんを掛けるんですか。」

「うんや、今度は此方がお生憎だ。些とも馴染でも情婦でもねえ。口説きやうに因つちや出來ねえ。」

え事もあるめえと思ふのよ。尤も惚れてるにや惚れてるんだ。待ちねえ、隣の室で口説いてら、然も二人がかりだ。」

「一寸、」

と留めて姉さんは興さめ顔。

「此方は一人だ、今に來たら、お前も手傳つて口説いて呉んねえ。何だ、何だ、(と聞く耳立てて) 純潔な愛だ。けつのあひたあ何だい。」

と、襖にどしんと顔を當てて、

「蟻の戸渡で居やあがらあ、べらぼうめ。」

「やかましい！」

隣の室から堪りかねたか叱咤した。

「地聲だ！」

あれ、

と女中が留めようとする手も届かず、ぱたりめ組が襖を開けると、何時の間に用意をしたか、取つて捨てた手拭の中から腹掛を出た出刃庖丁。

「此の毛唐人めら、汝、何うするか見やあがれ。」

あつと云つて、眞前に縁へ遁げた洋服は——河野英吉。續いて駈出さうとする照陽女學校の教頭、宮畑閑耕の胸づくし、釦が引ちぎれて迂つた手で、背後から抱込んだ。

「其、其處に泣いていらつしやるなア大先生の嬢様でがせう。飯田町の路地で拜んで、一度だが忘れねえ。此奴等が此の地獄宿へ引張込んだのを見懸けたから、ちびりく遣りながら、癡の色ばなしを冷かしといて、ゆつくり撲らうと思つたが、勿體なくツて我慢ならねえ。酒井さんのお嬢さん、私が恚うやつて居る處を、此處へ來て、此ン唐人打挫いてお遣なせえ、お打ちなせえ、お打ちなせえ。」

何うして又こんな處へ。……何、八丁堀へおいでなすつて。え、お歸んなさる電車で逢つたら、一人で遠歩きが怪しいから、教師の役目で檢べるツて、……沙汰の限りだ。

む、此奴等、活かして置くんぢやねえけれど、娑婆の違つた獸だ、盆に來て禮を云へ。」

と突飛ばすと、閑耕の匂つた身體が、縁側で、はあく夢中になつて體操のやうな手つきで居た英吉に倒れかゝつて、脚が搦んで漾ふ處へ、チャブ臺の鉢を取つて、ばらり天窗から豆を浴びせた。惣助呵々と笑つて、大音に、

「鬼は外、鬼は外——」

道子

二十九

夫の所好で白粉は濃い、色は淡い。淡しとて、容色の劣る意味ではない。秋の花は春のと違つて、艶を競ひ、美を誇る心が無いから、日向より蔭に、晝より夜、日より月に風情があつて、あはれが深く、趣が浅いのである。

河野病院長醫學士の内室、河野家の總領嬢、道子の俤は其であつた。

何の姉妹も活々として、派手に花やかで、日の光に輝いて居る中に、獨り慎ましかで、しとやかで、露を待ち、月にあこがる、芙蓉は丈のびても物寂しく、さした紅も、偏へに身躰らしく、装つた衣も、鈴蟲の宿らしい。

何時も引籠勝で、色も香も夫ばかりが慰むのであつたが、今日は寺町の若竹座で、某孤兒院に寄附の演劇があつて、其に附屬して、市の貴婦人連が、張出しの天幕を臨時の運動場にしつらへて、慈善市を開く。謂ふまでもなく草深の妹は先陣承りの飛將軍。其處で此の會の殆ど參謀長とも謂つべき本宅の大切な母親が、生憎病氣で、然したる事では無いが、推して然う云ふ場所へ

出て、氣配り心扱ひをするのは、甚だ豫後のために宜しからず、と醫家だけに深く注意した處から、自分で進んだ次第では無く、道子が出席することに成つた。——六月下旬の事なりけり。

朝涼の内に支度が出来て、そよ／＼と風が渡る、袖がひた／＼と腕に靡いて、引緊つた白の衣紋着。車を彩る青葉の緑、籠甲の中指に影が透く艶やかな圓鬘で、誰にも似ない瓜核顔、氣高く颯と乗出した處は、きり／＼として、然も優しく、媚かす溫柔して、河野一族第一の品。

嗜も氣風も此であるから、院長の夫人よりも、大店向の御新姐らしい。はたそれ途中一土手田畝道へかゝつて、青田越に富士の山に對した景色は、慈善市へ出掛ける貴女とよりは、淺間の社へ御代參の御守殿と云ふ風があつた。

車は病院所在地の横田の方から、此の田畝を越して、城の裏通りを走つたが、突かけ若竹座へは行くのでなく、やがて西草深へ挽込んで、桿棒は島山の門の、例の石橋の際に着く。

姉夫人は、餘り馴れない會場へ一人で行くのが頼りないので、菅子を誘ひに來たのであつたが、静かな内へ通つて見ると、妹は影も見えず、小兒達も、乳母も書生も居ないで、長火鉢の前に主人の理學士が唯一人、下宿屋に居て寢坊をした時のやうに詰らなさうな顔をして、膳に向つて新聞を讀んで居た。火鉢に味噌汁の鍋が掛つて、未だ其が煮立たぬから、恚うして待つて居るのである。

氣輕なら一番威かしても見よう處、姉夫人は少し腰を屈めて、縁から差覗いた、眉の柔な笑顔

を、綺麗に、小さく疊んだ手巾で半ば隠しながら、

「お一人。」

「やあ、誰かと思つた。」

と髻のべつたりした口許に笑は見せたが、御承知の爲人で、何うとも謂はぬ。

姉夫人は、矢張り半分隠れたまゝ、

「瀧ちゃんや、透さんは。」

「母様が出掛けるんで、跡を追ふですから、乳母が連れて、日曜だから山田(玄關の書生の名)もついて遊びです。平時だと御宅へ上るんだけれど、今日の慈善會には、御都合で貴女も出掛ける」と云ふから、珍らしくは無いが、又淺間へ行つて、豆か糞を食はしとるですかな。」

「では最う菅子さんは參りましたね。」

「先刻出たです。」

何爲待つてくれないのだらう、と云ふ顔色もしないで、

「あゝ、最つと早く來れば可うござんした。一所に行つて欲しかつたし、それに四五日お來えなさらぬから、瀧ちゃんや透さんの顔も見たくつて、」

と優しく云つて本意なさう。一門の中に、此の人ばかり、一人も小兒を持たぬ。

三十

姉夫人の、其の本意無げな様子を見て、理學士は、あゝ、氣の毒だと思ふと、此の人物だけに一層口重に成つて、言譯もしなければ慰めもせずに、希代にニヤリとして黙つて了ふ。

と直ぐ出掛けようか、何うしようと、氣拔のした姿うら寂しく、姉夫人も言なく、手を掛けて居た柱を背に向直つて、黒塚越に、雲切れがしたやうに合歡の散つた、日曜の朝の青田を見遣つた時、ぶつ／＼騒しい鍋の音。

只見ると、むら／＼と湯氣が立つて、理學士が蓋を取つた、が餘程腹が空いたと見えて、「失禮します。」と碗を手にする。

「お待ちなさいまし、煮詰りはしませんか。」

と肉色の紹の長襦袢で、縮縮緬の襖摺る音なひ、する／＼と長火鉢の前へ行つて、科よく覗いて見て、

「まあ、辛うござんすよ、これぢや、

と銅壺の湯を注して、杓文字で一つ軽く壓へて、

「お装け申しませう、」と艶麗に云ふ。

「恐縮ですな。」

と碗を出して、理學士は、道子が、毛一筋も亂れない圓鬘の艶も溢さず、白粉の濃い襟を据ゑて、端然とした白襟、薄お納戸の其の紗綾形小紋の紋着で、味噌汁を装ふ白々とした手を、感に堪へて見て居たが、

「玉手を勞しますな、」

と一代の世辭を云つて、嬉しさうに笑つて、

「御馳走(とチウと吸つて)是は旨い。」

「人様のもので義理をして。ほゝゝ、お土産も持つて参りません。」

其挨拶もせずに、理學士は箸もつけないで、ゴックゴック。

「非常においしいです。僕は味噌汁と云ふものは、鹽が辛くなきや湯を飲むやうな味の無いものだとはかり思つたです。今、貴女、干杓に二杯入れたですね。彼は汁を旨く喰はせる禁厭ですかね。」

「はい、お禁厭でございます。」

と云つた目のふちに、蕾のやうな微笑を含んで居たから。

「は、は、は、串戯でせう。」

「菅子さんに聞いて御覽なさいまし。」

「然う云へば貴女、最うお出掛けなさらなければなりませんまいで。」

「は、私は些とも急ぎませんけれど、今日は名代も兼ねて居りますから、疾く参つてお手傳ひをいたしませんと、又菅子さんに叱言を言はれると不可ません——最う其では、若竹座へ参つて居ります時分でせうね。」

「うんえ、」

頬ばつた飯に籠つて、變な聲。

「道寄をしたですよ。貴女是からおいでなさるなら、早瀬の許へお出でなさい、彼處に居ませうで。」

「しますと、あの方も御一所なんですか。」

「一所ぢやないです。早瀬があ、言ふ依怙地もんです。半分馬鹿にして居て、孤兒院の義捐なぞ賛成せんです。今日は會へも出んと云ふさうで。其を是非説破して引張出すんだと云ひましたから、今頃は盛に長紅舌を弄して居るでせう、は、は、は、と調子高に笑つて、厭な顔をして、

「行つて見て下さらんか。貴女、」

「はい、」

と何爲か俯向いたが、姉夫人は其まゝしとやかに別れの會釋。

「又逢違ひになりませんやうに、それでは御飯を召食りかけた處を、失禮ですが、」

「いや、最う濟んだです。」

其日は珍らしく理學士が玄關まで送つて出た。

絹足袋の、靜な疊ざはりには、客の來たのを心着かなかつた鞠子の婢も、旦那様の踏みだいで出る蹺音に、ひよつこり臺所から顔を見せる。

「今日は、」

と少し打傾いて、姉夫人が、物優しく聲をかける。

「ひやあ、と打魂消て棒立ちに成つたは、出入りをする、貴婦人の、自分にこんな様子をしてくれるのは、つひぞ有つた驗が無いので。

車夫が門外から飛込んで來て駒下駄を直す。

「A B 横町でしたかね。彼處へ廻りますから、」

「へい、へい、ペロペロの先生の。」と心得たるものである。

早瀬は、妹が連れて父の住居へも来れば病院へも二三度来て知つて居るが、新聞にまで書いた、塾の(小使)と云ふ壯俊はどんなであらう。男世帯だと云ふし、他に人は居ないさうであるから、取次には屹と其の(小使)が出るに違ひない、と籠勝な道子は面白いものを見もし聞もしするやうな、物珍らしい、楽しみな、時めくやうな心持もして、早や大巖山が幌に近い、西草深のはづれの町、前途は直ぐに阿部の安東村に成る——近來評判のABC横町へ入ると、前庭に古びた黒塀を廻らした、平屋の行詰つた、それでも一軒立ちの門構、低く傾いたのに、獨語教授、と看板だけ新しい。

車を待たせて、立附けの悪い門をあければ、女の足でも五歩は無い、直き正面の格子戸から物靜かに音づれたが、あの調子なれば、話聲は早や聞えさうなもの、と思ふ妹の聲も響かず、可訝な顔をして出て来ようと思つた其の(小使)でもなしに、車夫の所謂へろへろの先生、早瀬主税、左の袖口の綻びた廣袖のやうな緋の單衣でひよいと出て、顔を見ると、是は、とばかり笑み迎へて、さあ、此方へ、と云ふのが、座敷へ引返す途中に成るまで、氣疾に引込んで了つたので、左右の暇も無く、姉夫人は鶴が山路に踏迷つたやうな形で、机だの、卓子だの、算を亂した中を拾

つて通つた。

菅子さんは、と先づ問ふと、未だ見えぬ。が、孰れお立寄りに相違ない。今にも威勢の可い駒下駄の音が聞えませう。格子がからりと鳴ると、立處に此の部屋へお姿が露れますからお休みなさりながらお待ちなさい、と机の傍に坐り込んで、煙草を喫まうとして、打棄つて、ファイと立つて蒲團を持出すやら、開放しませう、と障子を押開いたかと思ふと、此方の庭が最う些とあると宜しいのですが、と云ふやら。散らかつて居りまして、と床の間の新聞を投げ出すやら。火鉢を押出して突附けるかとすれば、何だ、熱いの、と急いで又摺すやら。何故か見苦しいほど慌し氣で、蜘蛛の圍をかけるやうに煩く夫人の居まはりを立ちつ居つ。間には口を續けて、能く入らず饒舌つたのである。

「まあ、まあ、何うぞ、何うぞ、

と其の中に落着いた夫人もついで、口早に成つて、顔を振上げながら、些と胸を反らして、片手で煙を拂ふやうな振をした。

婦系圖

早瀬は其の時、机の前の我が座を離れて、夫人の背後に突立つて居たので、上下に顔を見合せた。餘り騒がれたためか、内氣な夫人の顔は、臉に色を染めたのである。

と、早瀬は人間が變つたほど、落着いて座に返つて、徐に卷蓆を取つて、まだ吸ひつけないで、
びたりと片手を膝に支いた、肩が聳えた。

「夫人、貴女は是から慈善市へ入らして、貧者のためにお働きなさるんですねえ。」
と沈んで云ふ。

顔を見詰められたので、睫毛を伏せて、

「はい、ですが私は唯お手傳ひでございます。」

「お願いがございます。」

と囁るが如く、主税がはたと両手を支いた。

餘り意外な事の體に、答ふる術なく、黙つて流眄に見て居たが、果しなく頭も擡げず、突いた
手に疊を掴むだ憂慮しさに、棄ても置かれぬ氣に成つて、

「貴下、まあ、更まつて何でございますの。」

とは云つたが、思入つた人の體に、氣味悪くもなつて、遁腰の膝を浮かせる。

「失禮な事を云ふやうですが、今日の催はじめ、貴女方のなさいます慈善は、博くまんべんなく
情をお懸けに成りますので、早に雨を降らせると同様の手段。萎えしぼんだ草樹も、其の恵に依
つて、蘇生するのでありますが、然し其は、廣大無邊な自然の力でなくつては出来ない事で、人間

業ぢや、なか／＼焼石へ如露で振懸けるぐらゐに過ぎますまい

三十一

「廣く行渉るばかりを望んで、途中で群消えに成るやうな情を掛けずに、其の恵の露を湛へて、
唯一つのものの根に灌いで、名もない草の葉だけでも、蒼々と活かして頂きたい。」

大勢寄つてなさる仕事を、貴女方、各々御一人宛で、専門に、完全に、一人を救つて下さるわ
けには参りませんか。力が餘れば二人です、三人です、五人ですな。餘所の子供の世話を焼く隙
に、自分の兒に風邪を感かせないやうに、外國の奴隷に同情をする心で、御自分お使ひに成る女
中を勤つて遣つて欲しいんですが、是ぢや大摺みのお話です、何も其を彼此申上げるわけでは無
いのです。

處が、差當り、今日の前に、貴女の一雫の涙を頂かないと、死んでも死に切れない、あはれな
者があるんです。

此の事に就きましては、私は夜の目も合はないほど心を苦めまして。」

と漸々少し落着いて、

「前から、貴女の御憐愍を願はうと思つて居たんですけれど、島山さんのと違つて、貴女には輕

軽くお目に懸る事も出来ませんし、然うかと云つて、打棄つて置けば、取返し成りません。大事、何うしようかと存じて居りました處へ、實に何とも思ひがけない、不思議な御光來で、殊に其が慈善會に入らつしやる途中などは、神佛の引合はせと申しても宜しいのです。

何うぞ、其の、遍く御施しに成らうと云ふ如露の水を一雫、一滴で可うございます、私の方へお配分なすつてくださるわけには参りませんか。

御存じの風來者でありますけれども、早瀬が一生の恩に被ります。

と拳を握り緊めて云ふのを、半ば驚き、半ば呆れ、且つ恐れて聞いて居たやうだつた。重かつた夫人の眉が、此に至ると微笑に開けて、深切に、しかし寝めるやうな優しい調子で、

「お金子が御入用なんでしょうか。」

と胸へ、しなやかに手を當てたは、次第に依つては、直にも帯の間へ這つて、懐紙の間から華奢な(囊物)の動作である。道子は屢々、妹の口から風説されて、其の暮向を知つて居た。

ト早瀬の聲に力が入つて、

「金子にも何にも、私が、自分の事ではありません。」

「まあ、失禮な事を云つて、

と襟を合はせて面を染め、

「何うしませう私は。では貴下の事ではございませんので。」

「え、勿論、救つて頂きたい者は他にあるんです。」

「何うぞ、あの、其は島山の御相談下さいまし。私も又出来ますことなら、蔭で——お手傳ひいたしませうけれど、河野(醫學士)が、喧しうございますから。」

……差俯向いて物寂しう、

「私が自分では、何うも計らひ兼ねますの。其には不調法でもございますし……何も、妹の方が馴れて居りますから。」

「否、貴女で無くては不可んです。ですから途方に暮れます。其の者は、其れに最う死にかつた病人で、翌日も待たないと云ふ容體なんです。」

六十近い老人で、孫子は固より、親類らしい者もない、全然やもめで、實際形影相弔ふと云ふ其の影も、破蒲團の中へ消えて、骨と皮ばかりの、其の皮も貴女、褥摺れに摺切れて居るぢやありませんか。

日の光も見えない目を開いて、其で唯一目、唯一目、貴女、夫人の顔が見たいと云ひます。」

「え、」

「御介抱にも及びません、手を取つて頂くにも及びません、言をお交はし下さるにも及びません、

申すまでもない、金錢の御心配は決して無いので。眞暗な地獄の底から一目貴女を拜むのを、佛とも、天人とも、山の端の月の光とも思つて、一生の思出に、莞爾したいと云ふのですから、お聞届け下さると、實に貴女は人間以上の大善根をなさいます。夫人、大慈大悲の御心持で、此の願ひをお叶へ下さるわけには参りませんか、十分間とは申しません。」

と、じり／＼と寄ると、姉夫人、思はず膝を進めつつ、

「何處の、どんな人でございますの。」

「直き此の安東村に居るんです。貞造と申して、以前御宅の馬丁をしたもので、……夫人、貴女の、實の……御父上……」

三十三

「其の……手紙を御覽なさいましたら、最うお疑はありますまい。其は貴女の御父上、英臣さんが、御出征中、貴女の母様が御宅の馬丁貞造と……」

早瀬は一寸言を切つて……夫人が其時、わな／＼きつ、持つ手を落して、膝の上に翻然と一葉、半紙に書いた女文字。其の玉草の中には、恐ろしい毒藥が塗籠んででもあつたやうに、眞蒼に成つて、白襟にあはれ口紅の色も薄れて、頗深く差入れた、佛を吃と視て、

「……などと云ふ言だけも、貴女方のお耳へ入れられる筈のものぢやありません、けれども、差迫つた場合ですから、繕つて申上げる暇もありません。」

で、其のために貴女がおできなすつたんで、まだお腹にいらつしやる間には、貴女の母様が水にもしようか、と云ふ考へから、土地に居ては、何かにつけて人目があると、以前、母様をお育て申した乳母が美濃安八の者で、——唯今島山さんの玄關に居る書生は孫ださうです。其處へ始末を爲に行つてお在なすつた間に、貞造へお遣はしなすつたお手紙なんです。

馬丁はして居たが、貞造は然るべき祿を食んだ舊藩の御馬廻の忤で、若氣の至りぢやあるし、附合ふものが附合ふものですから、御主人の奥様と出來たのを、嬉しい紛れ、鼻で指をさして、つい酒の上ぢや惚氣を云つた事もあるさうですが、根が悪人ではないのですから、兒をなくすと云ふ恐い相談に震ひ上つて、其の位なら、御身分をお棄てなすつて、一所に遁げておくんなさい。お肯入れ無く、思切つた業をなさりや、表向きに坐込む、と變つた言種を爲すために、奥さんも思案に餘つて、氣を揉んで居なすつた處へ、思ひの外用事が早く片附いて、英臣さんが凱旋でせう。腹帯には些と間が在つたもんだから、其なりに日が経つて、貴女は九月兒でお在なさる。

が、世間ぢや、あ、よくお育ちなすつた、河野さんは、お家が醫者だから。……然うで無いと、大抵九月兒は育たんものだと申します。又舊弊な連中は、戦争で人が多く死んだから、生れ

るのが早い、と云つたさうです。

名譽に、とお思ひなすつたか、其とも最初の御出産で、お喜びの餘りか、英臣さんは現に貴女の御父上だ。

貞造は、無事に健かに産れた兒の顔を一目見ると、安心をして、貴女の七夜の御祝ひに酔つたのがお殘懷で、お暇を頂いて、お邸を出たんです。

朝晩お顔を見て居ちや、又どんな不了簡が起るまいものでも無い、と云ふ遠慮と、其に肺病の出る身體、若い内から儂麻質があつたさうで、旁々お邸を出ると成ると、力業は出來ず、然うかと云つて、其の時は未だ達者だつた、阿母を一人養はなければ成らないもんですから、奥さんが手切なり心着なり下すつた幾干かの金子を資本にして、初めは淺間の額堂裏へ、大弓場を出したさうです。

幸ひ商賣が的に當つて、何うにか食つて行かれる見込みのついた處で、女房を持つたんですがね。いや、罰は靦面だ。境内へ多時かゝつて居た、見世物師と密通いて、有金を攫つて遁げたんです。然も貴女、女房が孕んで居たと云ふぢやありませんか。

「まあ、」
と、夫人は我知らず嘆息した。

「忌々しい、と其處で大弓の株を賣つて、今度は安東村の空地を安く借りて、馬場を拵へて、貸馬を行つたんですな。

貴女、其こそ乳母日傘で、お淺間へ參詣に行らした歸り途、圓い竹の埒に擱つて、御覽なすつた事もありませう。道々お摘みなすつた鼓草なんぞ、馬に投げて遣つたりなさいましたのを、貞造が知つて居ます。

阿母が死んだあとで、段々馬場も寂れて、一齊に二頭斃れた馬を賣つて、自暴酒を飲んだのが、最う飲仕舞で。米も買へなくなる、粥も薄くなる。漸と馬小屋へ根太を打附けたので雨露を凌いで、今も其處に居るんですが、馬場のあとは紺屋の物干に成つたんです。……」

三十四

「私は不思議な縁で、去年靜岡へ參つて……然も其の翌日でした。島山さんのと、淺間を通つた時、茶店へ休んで、其の貞造に逢つたんです。それから恚う云ふ祕密な事を打明けられるまで、懇意に成つて、唯今の處ぢや、是非貴女のお耳へ入れなくつては成りませんほど、老人危篤なのでございいます。

私でさへ、是は一番貴女に願つて、逢つて遣つて頂きたいと思ひましたから、今迄幾度か病人

に勧めても見ましたけれども、否々、何にも御存じない貴女に、恚う云ふ事をお聞かせ申すのは、足を取つて地獄へ引落すやうなもの。あとぢや月も日も、貴女のお目には暗くならう。お最惜い、と貞造が頭を掉ります。

道理だと控へました。尤も私も及ばずながら醫師の世話もしたんです、薬も飲ませました。名高い醫學士でお在なされるから一ツ河野さんの病院へ入院してはどうか、餘所ながらお道さんのお顔を見られようから、と云ひましたが、以つての外だ、と肯きません。

清い者です。

人の悪い奴で御覽なさい、對手が貴女の母様で、其のお手紙が一通ありや、貞造は一生涯朝から刺身で飲めるんですぜ。

又些とても強情りがましい了見があつたり、一錢たりとも御心配を掛るやうな考があるんなら、私は誓つて口は利かんです。

然うぢや無い！唯一目拜みたいと云ふ、其さへ我慢をし抜いた、其もです……老人自分ぢや、未だ治らないとは思つて居なかつたからなので。煎じて飲むのがまだるツこし、薬鍋の世話をするものも無いから、薬だと云ふ芭蕉の葉を、青いまんまで嚙つたと言ひます——

其の元氣だから、何うか恚うか薬が利いて、一度なんざ、私と一所に安倍川へ行つて餅を食べ

て茶を喫んで歸つた事もあつたんですが、其がい、めを見せたんで、先頃から又どツと襟に着いて、今は断念めた處から、貴女を見たい、一目逢ひたいと、現に言ふやうに成つたんです。

容態が容態ですから、何うぞ息のある内にと心配をして居たんですが、人に相談の出来る事ぢやなし、御宅へ參つてお話をしようにも、こりや貴女と對向ひでなくつては出来ずまい。

失禮だけれども、御主人の醫學士は、非常に貴女を愛して在らつしやるために、恐ろしく嫉妬深い、と島山さんのに、聞きました。

殆ど當惑して居た處へ、今日のおいでは實に不思議と云つても可い。一言（父よ。）とおつしやつて、と其までも望むんぢや無いのです。彌陀の白光とも思つて、貴女を一目と、云ふのですから、逢つてさへ下されば、其こそ、あの、屋中眞黒に下つた煤も、藤の花に咲かはつて、其の紫の雲の中に、貴女のお顔を見る嬉しさは何んなでせう。

然うなれば、不幸極まる、あはれな、情ない老人が、却つて百萬人の中に一人も得られない幸福なものも成つて、明かに端麗な天人を見ることを得て、極樂往生を遂げるんです、——夫人。と云つた主税の聲が、夫人の肩から總身へ浸渡るやうであつた。

「貞造は、貴女の實の父親で、又或意味から申すと、貴女の生命の恩人ですよ。」

「は……い。」

「會は混雜（こんざつ）しませう。若竹座（わかたけざ）は大變（たいへん）な人でせう。其（それ）に夜（よ）も更（よ）けると申（ま）しますから、人目（ひとめ）を紛（ま）らすのに仔細（しさい）ありません。得難（えがた）い機會（きかい）です。私（わたくし）がお供（とも）をして、一寸（いちゆづみ）見舞（まひ）に參（まゐ）るわけにはまゐりませんか。」

と片手（かたて）に燐寸（マツチ）を持つたと思（おも）ふと、片手（かたて）が衝（つ）と伸（の）びて猶豫（ため）はらず夫人（ふじん）の膝（ひざ）から、古手紙（ふるてがみ）を、ト引（ひ）取（と）つて、

「一度（ひと）お話（はなし）した上（うへ）は、たとひ貴女（あなた）が御不承知（ごふしょうち）でも、最（も）うこんなものは、」

と燐（ばつ）と火（ひ）を摺（す）ると、ひら／＼と燃（も）え上（あ）つて、蒼（あを）くなつて消（き）えた。が、靡（なび）きかゝる煙（けり）の中に、夫人（じん）の顔（かほ）がちら／＼と動（うご）いて、何（なん）となく、誘（さそ）はれて膝（ひざ）も揺（ゆ）ら揺（ゆ）ら。

居坐（ゐまひ）を直（なほ）して、更（あらた）まつて、

「お連れ（つ）れ下さいまし、何（なん）うぞ。」

がら／＼と格子（かうし）の開（あ）く音（ね）を。それ、言（い）はぬことか。早（はや）や座（ざ）に見（み）えた菅子（すがこ）の姿（すがた）。眩（まぼろ）いばかりの装（よそ）ひで、坐（すわ）りもやらず、

「まあ、姉（ねえ）さん！」

私（まごめ）語（こと）

三十五

「最（も）う遅（おそ）いわ、姉（ねえ）さん、早（はや）く行（い）らつしやらないでは、何（なん）をして居（ゐ）るの、」

と菅子（すがこ）は立（た）つたまゝ、で急（せき）込んで云（い）ふ。戸外（かど）の暑（あつ）さか、駈（か）込んだ所（ところ）爲（な）か、赫（くわつ）と逆（さか）上（あ）げた顔（かほ）の色（いろ）。胸（むね）打（うち）騒（さわ）げる姉夫人（あねふじん）、道子（みちこ）が却（かへ）つて物（もの）靜（しず）かに、

「先（さき）刻（とき）から待（ま）つて居（ゐ）たんですよ。」

「待（ま）つて居（ゐ）たつて、私（わたし）は方（ほう）々（く）に用（よう）があるんだもの、早（さつ）々と行（い）つて下（くだ）さらないぢや、」

「何（なん）ですなえ、邪（じ）険（けん）な、和（あ）女（にょ）を待（ま）つて居（ゐ）たんですよ。來（き）がけに草（くさ）深（ふか）へも寄（よ）つたのよ。一（いっ）所（しょ）に連（つ）れて行（い）つて欲（ほ）しいと思（おも）つて。——さあ、其（それ）では行（い）きませうね。」

「私（わたし）は用（よう）があるわ。」

「寄（よ）道（みち）をするんですか。」

「ぢや……無（な）いけども、是（これ）から、此（こ）の早（はや）瀬（せ）さんと一（いっ）議（ぎ）論（ろん）して、何（なん）でも慈（じ）善（ぜん）會（かい）へ引（ひ）張（は）り出（だ）すんですから手（て）間（ま）が取（と）れてよ。」

と未だ坐りもせぬ。

主税は腕組をしながら、

「は、は、まあ、貴女も、お聞きなさい、お菅さんの議論と云ふのを。いくら僕を説いたつて、何にもなりやしないんですから。」

「承はつて参りませうか。」

と姉夫人が立ちかけた膝を又据ゑて、何となく残惜さうな風が見えると、

「早く行らつしやらなくつちや……私は可いけれども、姉さん、貴女は兄さん（醫學士）がやかま

しいんだもの、面倒よ。」

と見下す顔を、斜めに振仰いだ、蒼白い姉の顔に、血が上つて、屹と成つたが、寂しく笑つて、

「あ、然うね、私は前に参りませう。會場の様子は分らないけれど、別にまごつくやうな事はありますまいから。」

とおとなしく云つて、端然と會釋して、

「お邪魔をいたしましたしてございます。」と一寸早瀬の目を見たが——雙方で瞬きました。

「まあ、御一所が宜しいぢやありませんか。お菅さんも然うなさい。」

「否、然うしては居られません、最つと、」

と聲に力が籠つて、

「種々お話を伺ひたう存じますけれども……」

「私も、直だわ。」

「待つて居ますよ。」

と優しい物越、悄悄と出る後姿。主税は玄關へ見送つて、身を蔽にして、密と其の袂の端を壓

へた。

「然やうなら！」

勢よく引返すと、早や門の外を輾轉として車が行く。

「暑い、暑い、何うも大變に暑いね。」

菅子は最う其處に、袖を軽く坐つて居たが、露の汗の惱ましげに、朱鷺色縮緬の上の端を寛めた、邊は晝顔の盛りのやうで、明い部屋に白々地な、衣ばかりが冷しい蔭。

「久振だわね。」

「久振ぢや無いぢやありませんか。今の言種は何です、ありや。……姉さんにお氣の毒で、傍で

聞いて居られやしない。」

「だつて事實だもの。病院に入院で居ながら、何時の何時には、姉さんが誰と話をしたつて事、

不殘且那樣御存じなの、最う思召つたら無いんですからね。

其でも大事にして置かないと、院長は家中の嫁ぎ人で、すつかり經濟を引受けてるんだわ。お庇様で一番末の妹の九ツに成るのさへ、早や、ちやんと嫁入支度が出来てるのよ。

道樂一ツするんぢやなし、唯、姉さんを樂みにして働いて居るんですからね。些とても怒らしちや大變なのだから、貴下も氣をつけて下さらなくつちや困るわ。」

「何を云つてるんです、面白くもない。」

「今の様子ツたら何です、厭に御懇ね。而して肩を持つことね。油斷もすきも成りはしない。」

「可い加減になさい。串戲も、」

「だつて姉さんが、どんな事があればたつて、男と對向ひで五分間と居る人ぢやないのよ。貴下は口前が巧くつて、調子が可いから、だから坐り込んで居るんぢやありませんか。眞個に厭よ。」

貴下浮氣なんぞしちや、最う、澤山だわ。」

「まるで是や、人情本の口繪のやうだ。何です、對向つた、此の體裁は。」

三十六

しめやかな聲で、夫人が――

「貴下……何うするのよ。」

「私が是ほど願つても、未だ妙子さんを兄さん(英吉)には許してくれないの。今までにもどんなに頼んだか知れないのに、それぢや貴下、餘りぢやありませんか。」

去年から口説通しなんだわ。貴下がはじめて、静岡へ来て、私と知己に成つたと云ふのを聞いて、(精一杯御待遇をなさい。)ツて東京から母さんが手紙で然う云つて寄越したのも、酒井さんとの縁談を、貴下に調べて頂きたければこそだもの。

母さんだつて、何のくらの心配して居るか知れないんだわ。今まで、つひぞ有つた験は無い。此方から結婚を申込んで尅ねられるなんて、そんな事――河野家の不名譽よ、恥辱ツたらありませんものね。

兄さんも、どんなにか妙子さんを好いて居ると見えて、一體が遊蕩過ぎる處へ、今度の事ぢや失望して、自棄氣味らしいのよ、遣り方が。自分で自分を酒で殺しちや、厭ぢやありませんか、まあ、

と一際低聲で、

「一寸、如何な事でも小待合へなんぞ倒込むですつて。監督の叔父さんから内々注意があるも

んだから、最う疾くに兄さんへは家でお金子を送らない事にして、獨立で遣れッて名義だけれども、其の實、勘當同様なの。

此頃ぢや北町(桐楊塾)へも寄り着かないんですつて。

だつて何處に轉がつて居たつて、皆お金子が要るんでせう。何處から出て？いづれ借りるんだわ。また河野の家の事を知つて居て、高利で貸すものがあるんだから困つ了ふ。千と千五百と纏つたお金子で、母様が整理を着けたのも二度よ。洋行させる費用に、と云つて積立ててあつた兄さんの分は、疾の昔無くなつて、三度目の時には皆私たち妹の分にまで、手がついたんぢやありませんか。

妙子さんの話のはじまつてからは、丁ど私も北町へ行つて居て知つて居るけれど、其は、氣の毒なほど神妙に成つたのに。……

もと／＼氣の小さい、懐育ちのお坊ちゃんなんだから、遊蕩も駄々で可かつたんだけど、其だけに又自棄に成つちや亂暴さが堪らないんだもの。

病院の義兄は養子だし、大勢の兄弟中に、漸と學位の取れた、かけ替へのない人を、そんなにして了つちや、其は家でも眞個に困るのよ。

早瀬さん、貴下の心一つで、話が纏まるんぢやありませんか。私が頼むんだから助けると思つ

て肯いて頂戴、ねえ……それぢや、餘り貴下薄情よ。

「ですから、ですから。」

と壓へるやうに口を入れて、

「決して厭だとは言ひません。厭だとは言ひやしない。是からでも飛んで行つて、先生に話をし結納を持つて歸りませう。」

事もなげに打笑つて、

「それぢや反對だつた。結納は此方から持つて行くんでしたつて。」

「其のかはり又、(あの安東村の紺屋の隣家の乞食小屋で結婚式を擧げる)ツて言ふんでせう。貴下は何故然う依怙地に、さもしいお米の價を氣にするやうなことを言ふんだらう。」

眞個に串戯では無いわ！一家の浮沈と云つたやうな場合ですからね。私もどんなに苦勞だか知れないんだもの。御覽なさい、瘦せたでせう。此頃ぢや、此方に、何な事でもあるやうに、島山(理學士)を見ると、最うね、身體が萎むやうな事があるわ。土間へ駈下りて靴の紐を解いたり結んだりして遣つてるぢやありませんか。

跪いて、夫の足に接吻をする位なものよ。誰が爲せるの、早瀬さん。——貴下の意地ひとつぢやありませんか。

些とは察して、背いてくれたつて、満更罰は當るまいと、私思ふんですがね。
机に凭れて、長く成つて笑ひながら聞いて居た主税が、屹と居直つて、
「ぢや貴女は、御自分に面じて、お妙さんを嫁に欲しいと言ふんですか。」
「まあ……然うよ。」
「然う、其では色仕掛になすつたんだね。」

三十七

「怒つたの、貴下、怒つちや厭よ、私。貴下は眞個に此節ぢや、何うして、そんなに氣が強くなつたらうねえ。」
「貴女が水臭い事を言ふからさ。」
「何方が水臭いんだか分りはしない。私はまさか、夜内を出るわけには行かず、お稽古に來つて、大勢入込みなんだもの。ゆつくりお話をする間も無いぢやありませんか。」
「過日何と言ひました。あの合歡の花が記念だから、夜中に彼處へ忍んで行く——蟲の音や、蛙の聲を聞きながら用水越に立つて居て、貴女があゝの黒堀の中から、慥う、抜帯か何ぞで、姿を見せて下すつたら、どんなだらう。花がちら／＼するか、闇か、螢か、月か、明星か。世の中がど

んな時に、そんな夢が見られませう——なんて申戲云ふから、洗濯をするに可いの、瓜が冷せて面白いのツて、島山に然う云つて、到頭彼處の、板塀を切抜いて水門を拵へさせたんだわ。
頭痛がしてならないから、十疊の眞中へ一人で寝て見たいの、なんのツて、都合をするのに、貴下は、素通りさへしないぢやありませんか。」
「演劇のやうだ。」
と低聲で笑ふと、
「理想實行よ。」と笑顔で言ふ。
「何うして渡るんです。」
「まさか橋をかける言種は、貴下、無いもの。」
「だから、渡られますまい。」
「合歡の樹の枝は低くつてよ。摺つて、お渡んなさいなね。」
「河童ぢやあるまいし、」
「ほ、ほ、」
と今度は夫人の方が笑ひ出したが。
「何にしろ、貴下は不實よ。」

「何が不實です。」

「何うかして下さいな。」

——更つて——

「妙子さんを。」

「ですから色仕掛けか、と云ふんです。」

「あんな恐い顔をして、(と莞爾して)眞個はね、私……自ら欺むいて居るんだわ。家のために、自分の名譽を犠牲にして、貴下から妙子さんを、兄さんの嫁に貰はう、と然う思つて此方へ往來をして居るの。」

で無くつて、何うして島山の顔や、母様の顔が見て居られます。第一、乳母にだつて面を見られるやうよ。其にね、何爲か、誰よりも目の見えない娘が一番恐いわ。母さん、と云つて、あの、見えない目で見られると、悚然してよ。私は元氣で居るけれど、何だか、其のために生身を削られるやうで瘡せるのよ。可哀相だ、と思つたら、貴下、妙子さんを下さいな。其が何より私の安心になるんです。……其にね、他の人は、でも無いけれど、母様がね、其はね、實に注意深いんですから、何だか、然うねえ、春の歌留多會時分から、有りもしない事でもありさうに疑つて居るやうなの。もしかしたら、貴下私の身體は何うなると思つて？ ですから妙子さんさへ下され

ば、有形にも無形にも立派な言譯に成るんだわ。ひよつとすると、母様の方でも、妙子さんの爲にするのだ、と思つて居るのかも知れなくつてよ。顔さへ見りや、(私が何うかして早瀬さんに承知させます。)と、母様が口を利かない先に然う言つて置くから。よう、後生だから早瀬さん。」

言ひ言ひ、絶るやうに言ふ。

「詰らん言を。先生のお嬢さんを言譯に使つて可いもんですか。」

「然うすると、私最う、母さんの顔が見られなくなるかも知れませんよ。」

「僕だつて生きて二度と、先生の顔が見られないやうに……」と思はず拳を握つたのを、我を引

緊められた如くに、夫人は思ひ取つて、しみく、

「おや、私の、私の身體は何うなつて？」

「譯は無、島山から離縁されて、」

「そんな事が、出来るもんですか。」

「出来ないもんですか。當前だ、」

と自若として言ふと、呆れたやうに、又……莞爾、

「貴下は何うして然うだらう。」

「何うも慫うもありはしません、其が當前ぢやありませんか。義、周の粟を食はずとさへ云ふんだ。貴女、」

と主税は澄まして言ひ懸けたが、常ならぬ夫人の目の色に口を噤むだ。菅子は息急しい胸を壓へるのか、乳の上へ手を置いて、

「何だつて、そりや餘りだわ、早瀬さん、」
と、ツンとする。

「不都合ですとも！島山さんが喜ばないのに、慫うして節々おいでなさるんです。

其で居て、家庭の平和が保てよう法は無い。實は慫うくだ、と打明けて、御主人の意見にお任せなさい。私も又卑怯な覺悟ぢやありません。事實明かに、其の人の好まない自分の許へ令夫人をお寄せ申すんだから、謹んで島山さんの思はくに服するんだ。

だから貴女も然うなさい。懊惱も煩悶も有つたもんか。世の中には國家の大法を犯し、大不埒を働いて置いて、知らん顔で口を拭いて澄まして居ようなどと言ふ人があるが、間違つて居ます。」

夫人は是を戯のやうに聞いて、早瀬の言を露も眞とは思はぬ様子で、

「戯談おつしやいよ！嘘にも、そんな事を云つて、事が起つたら子供たちは何うするの？」

と皆まで言はせず、事も無げに答へた。

「無論、島山さんの心まかせて、一所に連れて出ると、言はれりや連れて出る。置いて行けとなら、置いて……」

「暢氣で怒る事も出来はしない。身に染みて下さいな、ね……」

「何が暢氣だらう、此のくらの暢氣で無い事はない。小使と私と二人口でさへ、今の月謝の収入ぢや苦しい處へ、貴女方親子を背負ひ込むんだ。静岡は六升代でも瘦腕にや堪へまさ。」

餘の事と、夫人は凝と瞻つて、

「私がかんなに苦勞をするのに、眞個に貴下は不實だわ。」

「いざと云ふ時、貴女を棄てて逐電でもすりや不實でせう。胴を据ゑて、覺悟を極めて、飽まで島山さんが疑つて、重ねて四ツにするんなら、先へ眞二ツに成らうと云ふのに、何が不實です。私は實は何にも知らんが、夫人が御勝手に遊びにおいでなさるんだなんて言ひはしない。」

「然う云つて了つては、一も二も無いけれど。」
「又、一も二も無いんですから、」

「だつて世の中は、然う貴下の云ふやうには参りませんもの。」

「成らんのぢやない、成る、が、勝手に爲んだ。戀愛は自由です、けれども、こんな世の中ちや罪に成る事がある。盗賊は自由かも知れん、勿論罪に成る。人殺、放火、凡て自由かも知れんが、罪に成りません。既に其の罪を犯した上は、相當の罰を受けるのが亦當前ちやありませんか。愚圖々々塗祕さうとするから、卑怯未練な、吝な、了見が起つて、他と不都合しながら亭主の飯を食つてるやうな、猫の戀に成るのがある。しみつたれてるぢやありませんか。度胸を据ゑて、首の座へお直んなさい。私なんざ疾くに——先生……には面は合はされない、お薦……の顔も見ないものと思つて居る。此の上は、何んなことだつて恐れはしません。」

其に貴女は、島山さんに不快を感じさせながら、未だ矢張、夫には貞女で、子には慈悲ある母親で、親には孝女で、社會の淑女で、世の龜鑑とも成るべき徳を備へた貴婦人顔をしようとするから、瘦せもし、苦勞もするんです。

浮氣をする、貞女、孝女、慈母、淑女、そんな者があるものか。」

「ぢや……私を、」

と擦寄つて、

「不埒と言はないばかりね。」

さすがに顔の色をかへて吃と睨むと、頷いて、

「同時に私だつて、」

と笑つて言ふ。

其の肩を突いて、

「まあ、仕やうの無い我儘だよ。」

三十九

「貴下は始めから然うなんだわ。……」

道學者の坂田(アバ大人)さんが、兄さんの媒口を利くのが癪に障るからつて、(攫徒の手つだひをして、參謀本部も諭旨免官に成りました。攫徒は、其の時の事を恩にして、警察では、知らない間に袂へ入れて置いて逆振を食はしたやうに云つてくれたけれど、其の實は、知つて居て攫徒の手から紙入を受取つて遣つたんだ。其で宜しくばお稽古にお出でなさい、早瀬主税は攫徒の補助をした東京の食話者です。)と此の塾を開く時、千鳥座か何處かで公衆に演説をする、と云つた人だもの——私が留めたから止したけれど……」

早瀬の胸のあたりに、背向きになつて、投げ出した襦袢を、熟と見ながら、

「私、何うしたら、そんな亂暴な人を友だちにしたらんだか。」

と自から怪むが如く獨言つと、

「不都合な方と知りながら、貴女と附合つてる私と同一でせう。」

「だつて私は、貴下のために悪いやうにと爲た事は一つも無いのに、貴下の方ぢや、私の身の立たないやうに、立たないやうにと言ふぢやありませんか。早瀬さんへ行くのが悪いんなら（何うでも爲て下さい、御心まかせ。）何のつて、そんな事が、譬へにも島山に言はれるもんですか。」

島山の方は、其れで離縁に成るとして、然うしたら、貴下、第一河野の家名は何う成ると思ふのよ。末代まで、汚點がついて、系圖が汚れるぢやありませんか。」

「既に云々が有るんぢやありませんか。其を祕さうとするんぢやありませんか。卑怯だと云ふんです。」

「そんな事を云つて、何故、貴下は、」

少し起返つて、尙背向きに、

「貴下に些とも悪意を持つて居ない、恚うして名譽も何も一所に捧げて居るやうな、」

と口惜しさうに、

「私を苦しめようとなさるんだらうねえ。」

「些とも苦しめやしませんよ。」

「夫だつて、亂暴な事を言つてさ、」

「貴女が困つて居るものを、何も好き好んで表向にしようと言ふんぢやない。不實だの、無情だの、私の身體は何うなるの、とお言ひなさるから、貴女の身體は、疑の晴れくもりで——制裁を請けるんだ、と言ふんです。貴女ばかり、と言つたら不實でせう。男が諸共に、と云ふのに、些とも無情な事はありますまい。何うです。」

と言ふ顔を斜めに視て、

「ですから、そんな打破しをしないで、妙子さんさへ下さると、圓滿に納まるばかりか、私も、どんなにか氣が易まつて、良心の呵責を免れることが出来ますッて云ふのにね。肯きますまい！其が無情だ、と云ふんだわ。名譽も何も捧げて居る婦の願ひぢやありませんか、肯いてくれたつて可いんだわ。」

「（名譽も何も）とおつしやるんだ。」

「あゝ、然うよ。」と振向いて清く目を睜く。

「何爲其の上、家も河野もと言はんのです。名譽を別にした家がありますか。家を別にした河野がありますか。貴女はじめ家門の名譽と云ふ氣障な考へが有る内は、情合は分りません。然う云

ふのが、夫より、實家の兩親が大事だつたり、他の娘の體格検査をしたりするのだ。お妙さんに指もささせるもんですか。

お妙さんの相談をしようと云ふんなら、先づ貴女から、名譽も家も打棄つて、誰なりとも好いた男と一所に成ると云ふ實證をお擧げなさい。」

と意氣込んで激しく云ふと、今度は夫人が、氣の無い、疲れたやうな、倦じた調子で、

「而して又(結婚式は、安東村の、あの、乞食小屋見たやうな茅屋で擧げろ)でせう。貴下はまるツ切私たちと考へが反對だわ。何だか河野の家を滅ぼさうと云ふやうな様子だもの、家に仇する敵だわ。何うして、そんな人を、私厭でないんだか、自分で自分の氣が知れなくつてよ。あゝ、而して、最う、私、慈善市へ行かなくつては。最う何でも可いわ！何でも可いわ。」

夫人と……別れたあとで、主税はクワツと障子を開けて、しばらく天を仰いで居たが、「あゝ、今日はお妙さんの日だ。」と、呟いて仰向けに寝た——妙子の日とは——日曜を意味したのである。

宵闇

四十

同、日曜の夜の事。

日が暮れると、早瀬は玄關へ出て、框に腰を掛けて、土間の下駄を引掛けたなり、洋燈を背後に、片手を突いて長く成つて一人で居た。よくぞ男に生れたる、と云ふ陽氣でも無く、蟲を聞く時節でも無く、家は古いが、壁から生えた芒も無し、繪でないから、一筆描きの月のあしらひも見えぬ。

ト忌々しいと言へば忌々しい、上框に、灯を背中にして、恰も門火を焚いて居るやうな——其の薄あかりが、格子戸を透して、軒で一度暗くなつて、中が絶えて、其から、ぼやけた輪を取つて、朦朧と、雨曝の木目の高い、門の扉に映つて、蝙蝠の影にもあらず、空を黒雲が行通ふか何ぞのやうに、時々、むら／＼と暗く成る……又明る成る。

目も放さず、早瀬が其を凝と視める内に、濁つたやうな其の灯影が、二三度揺々と動いて、やがて礫した波が、水の面に月輪を纏めた風情に、白やかな婦の顔が其處を覗いた。

門の扉が開くでも無しに……續いて雪のやうな衣紋が出て、其と映合つてくつきりと黒い鬢が、やがて薄お納戸の肩のあたり、きらりと光つて、帯の色の鮮麗に成つたのは——道子であつた。門に立忍んで、密と扉を開けて、横から様子を伺つたものである。

一目見ると、早瀬は、づいと立つて、格子を開けながら、手招きをする。と、立直つて後姿に

成つて、^{アア}横町の左右を胸す趣であつたが、うしろ向きに入つて、がら／＼と後を閉めると、三足ばかりを小刻みに急いで来て、人目の關には一重も多く、遮るものが欲しさうに、又格子を立てた。

「能うこそ、」と莞爾して云ふ。

姉夫人は、口を、疊んだ手巾で壓へたが、すツ／＼と息が忙しく、

「誰方も……」

「誰も。」

「小使さんは？」

と最う馴染んだか尋ね得た。

「彼は朝つから、貞造の方へ遣つてあります、目の離せません容態ですから。」

「何から何まで難有う存じます……一人の親を……濟みませんですなえ。」

と其の手巾が目障る。

「濟まないのは私こそ。でも能く會場が抜けられましたな。」

「はい、色艶が悪いから、控所の茶屋で憩むやうに、と皆さんが、然う言つて下さいましたから、好都合に、點燈頃の混雑紛れに出ましたけれど、宅の車では悪うございますから、途中で辻待

のを雇ひますと、気が着きませんでした、其が貴下、片々鱗目のやうで、其の可恐らしい目で、時々振返つては、あの、幌の中を覗きましてね、私はどんなに氣味が悪うござんしてせう。漸と此の横町の角で下りて、まあ、御門まで参りましたけれども、もしかお客様でも有つては悪いから、と少時立つて居りましたの。」

「お心づかひ、お察し申します。」

と頭を下げて、

「島山さんの、お音さんには。」

「今しがた参りました。あんなに遅くまで——此方様に。」

「否。」

「其では道寄りをいたしましたのでございませう。灯の點きます少し前に見えましたつけ、大勢の中でございますから、遠くに姿を見ましたばかりで、別に言も交はさないで、私は急いで出て参りましたので。」

「成程、いや、お茶も差上げませんで失禮ですが、手間が取れちや又お首尾が悪いと不可ません。

直ぐに、是から、

「何うぞ然うなすつて下さいまし、貴下、御苦勞様でございますなえ。」

「御苦勞處ぢやありません。さあ、お供いたしましたせう。」
不圖心着いたやうに、
「お待ちなさいよ、夫人。」

四十一

早瀬は今更ながら、道子が其の白襟の品好く麗しい姿を視めて、
「宵暗でも、貴女の其の態ぢや恐しく目に立つて、どんな事で又其の蠟目の車夫なんぞが見着け
まいものでもありません。一寸貴女手巾を。」
と慌しい折から手の觸るも顧みず、奪ふが如く引取つて、背後から夫人の肩を肩掛のやうに包
むと、撫肩は愈々細つて、身を萎めたが尙見好げな。
懷中から又手拭を出して、夫人に渡して、
「姉さん冠りと云ふのになさい、田舎者が爲るやうに。」
「どうせ田舎者なんですもの。」
と打傾いて、鬚に一寸手を當てて、
「慙うですか。」白地を被つて俯向けば、黒髪こそは隠れたれ、包むに餘る鬢の馥の、雪に梅花

を伏せたやう。

主税は横から右瞻左瞻で、
「不可い、不可い、尙目立つ。貴女、失禮ですが、裾を端折つて、然う、不可んな。長襦袢が突
丈ぢや、矢張清元の出語がありさうだ。」

と口の裡に獨言きつつ、
「お氣味が悪くつても、胸へためて、ぐつと上げて、足袋との間を思ひ切つて。あゝ、おいたは
しいな。」

「厭でございますね。」

「御免なさいよ。」

と言ふが疾いか、早瀬の手は空を切つて、體を踏んだと思ふと、

「あれ、」

くわつと成つて、ふら／＼と頭重く倒れようとした——手を主税の肩に突いて、道子は繩かに
支へたが、早瀬の掌には逸早く壁の隅なる煤を掬つて、是を夫人の脛に塗つて、穂にあらはれて
蔽はれ果てぬ、尋常な其の棲はづれを隠したのであつた。

「最う、大丈夫、河野の令夫人とは見えやしない。」

と、框の洋燈を上から、フツ！
留南奇を便に、身を寄せて、

「さあ、出掛けませう。」

胸に當つた夫人の肩は、誘はるゝまで、震へて居た。

此の横町から、安東村へは五町に足りない道だけれども、場末の賤が家ばかり。時に雨もよひの夏雲の閉した空は、星あるよりも行方遙かに、たまさか漏るゝ灯の影は、山路なる、孤家の其と疑はるゝ。

名門の女子深窓に養はれて、傍に夫無くしては、濫りに他と言葉さへ交へまじきが、今朝からの心の裡、蓋し察するに餘あり。

我は不義者の兒なりと知り、父は然も危篤の病者。逢ふが別れの今世に、臨終のなごりを惜むため、華燭銀燈輝いて、見返る空に月の如き、若竹座を忍んで出た、慈善市の光を思ふにつけても、横町の後暗さは冥土にも増るのみ歟。裾端折り、頬被して、男——とあられも無い姿。瞥りとも、人目に觸れて、貴女は、と一言聞くが最後よ、活きては居られない大事の瀬戸。辛く乗切つて行く先は……實の親の死目である。道子が心はどんなであらう。

大巖山の幻が、闇の氣勢に目を壓へて、用水の音凄しく、地を揺る如く聞えた時、道子は俯さへ、衣の色さへ、有るか無きかの聲して、

「夢では無いのでせうか知ら。宙を歩きますやうで、ふらくして、倒れさうでなりません。

早瀬さん、お袖につかまらして下さいまし。」

「堅乎と！ 可い鹽梅に人通りもありませんから。」

人は無くて、軒を走る、怪しき狗が見えたであらう。紺屋の暖簾の鯛の色は、燐火となつて燃えもせぬが、昔を知らればびづめの音して、馬の形も有りさうな、安東村へぞ着きにける。

四十二

道子は聲も徜徉ふやうに、

「此處は野原でございますか。」

「何故、貴女？」

「真中に恐しい穴がございますよ。」

「あゝ、其は道端の井戸なんです。」

と透しながら早瀬が答へた。古井戸は地獄が開けた、大なる口の如くに見えたのである。

早瀬より、忍び足する夫人の駒下駄が、却つて戦きに音高く、辿々しく四邊に響いて、やがて

眞暗な軒下に導かれて、其處で留まつた。が、心着いたら、心弱い婦は、得堪へず倒れたであらう、恰も其の頸の上に、例の白黒斑な狗が踞つて居るのである。

音訪ふ間も無く、どたんと疊を蹴て立つ音して、戸を開けると、つい其の框に眞赤な灯の、ほやの油煙に黒すんだ小洋燈の見ゆるが同時で、ぬいと立つたは、眉の迫つた、目の鋭い、細面の壯俊で、巾狭な單衣に三尺帯を尻下り、粹な奴を誰とかする、即ち塾の(小使)で、怪!怪!怪!アバ大人を拘損こねた、萬太と云ふ攫徒である。

はたと主税と面を合はせて、

「兄哥!」

「……………」

「不可えぜ。」と假色のやうに云つた。

「何だ——馬鹿、お連がある。」

「やあ、先生、大變だ。」

「何う、大變。」

衝と入る。杖に縋つて、牲の鳥の亂れ姿や、羽搔を傷めた袖を惱んで、時のやうな戸を潛ると、跣足で下りて、小使、カタリと後を鎖し、

「病人が冷く成つたい。」

「え、」

「今駈出さうてえ處でさ。」

「醫者か。」

「お醫者は直ぐに呼んで来たがね、最う不可えツて、今しがた歸つたんで。私あ、情として坐つて居ましたが、何でもこりや先生に來て貰はなくちや、仕様がないと、今漸と氣が附いて飛んで行かうと思つた處で。」

「そんな法はない。死ぬなんて、」

と飛び込むと、坐ると同時で、唯一室だから其處が褥の、筵のやうな枕許へ膝を落して、覗込んだが、慌しく居直つて、三布蒲團を持上げて、骨の蒼いのがくつきり見える、病人の仰向けに寝た胸へ、手を當てて熟としたが、

「奥さん、」

と靜に呼ぶ。

道子が、取つたばかりの手拭を、引摺るやうに膝にかけて、振を繕ふ違もなく、押並んで跪いた時、早瀬は退つて向き直つて、

「線香なんぞ買つて——それから、種々要るものを。」

「へい、宜うがす。」

茫乎戸口に立つて居た小使は、其の跣足のまゝ、飛んで出た。

只見れば、貞造の死骸の、恩愛に曳かれて動くのが、筵に響いて身に染みるやうに、道子の膝は打震ひつつ、幽に唱名の聲が漏れる。

「能く御覽なさいませよ。貴女も見せてお上げなさいよ。あゝ、暗くつて、其では顔が、」

手洋燈を摺らして出したが、灯が低く這つて届かないので、裏が紺屋の物干の、破襦子の下に汚れた飯櫃があつた、其へ載せて、早瀬が立つて持出したのを、夫人が伸上るやうにして、露をもつた目を見据ゑ、現の面を受取つたが、兩方掛けた手の震へに、ぶる／＼と動くと思ふと、坂に成つた蓋を這つて、啊呀と云ふ間に、袖に俯向いて、火を吹きながら、疊に落ちて碎けたではないか！ 天井が眞紫に、筵が赫と赤く成つた。

此の明で、貞造の顔は、活きて眼を開いたかと、蒼白た鼻も見えたが、松明のやうにひら／＼と燃え上る、夫人の裾の手拭を、炎ながら引摺んで、土間へ叩き出した早瀬が、一大事の聲を絞つて、

「大變だ、帯に、」と一聲。餘りの事に茫となつて、其時座を避けようとする、道子の帯の結目を、

引断れよ、と引いたので、横ざまに倒れた裳の煽り、乳のあたりから波打つて、炎に燃えつと見ええたのは、膚の雪に映る火を僅に襦袢に隔てたのであつた。トタンに早瀬は、身を投げて油の上をぐる／＼と轉げた。火は是がために消えて、しばらくは黒白も分かず。阿部街道を戻り馬が、遙に、ヒイインと嘶く聲。戶外で、犬の吠ゆる聲。

「可恐い眞暗ですな。」

品々を整へて、道の暗さに、提灯を借りて歸つて来た、小使が、のそりと入ると、薄色の紋着を、水のやうに疊に流して、夫人は其處に伏沈んで、早瀬は窓をあけて、襦子に腰をかけて、吻として腕をさすつて居た。——猛虎肉醉初醒時。揩磨苛痒風助威。

廊下づたひ

四十三

家の業でも、氣の弱い婦であるから、外科室の方は身震ひがすると云ふので、是非なく行かぬ事に成つて居るが、道子は、兩親の注意——寧ろ命令で、午後十時前後、寢際には必ず一度づゝ、入院患者の病室を、遍く見舞ふのが勤めであつた。

圖系婦

爾時は當番の看護婦が、交代に二人づ、附添ふので、唯（御氣分は如何ですか、お大事になさ
 いまし）と、ただだけれども、心優しき生來の、自から言外の情が籠るため、病者は少なからぬ
 慰安を感じて、結句院長の廻診より、道子の端麗な、此の姿を、待ち兼ねる者が多い。怪しから
 ぬのは、鼻風邪如きで入院して、貴女のお手づからお薬を、と唸ると云ふが、まさかであらう。
 で——此の事たるや、夫の醫學士、名は理順と云ふ——院長は餘り賛成はしないのだけれども、
 病人を慰めると云ふ仕事は、如何なる貴夫人がなすつても仔細ない美徳であるし、兩親も斷つて
 希望也、不問に附して黙諾の體で居る。

ト今夜もばたくと、上草履の音に連れて、下階の病室を済ました後、横田の田畝を左に見て、
 右に停車場を望んで、此の向は天氣が好いと、雲に連なつて海が見える、其の二階へ、雪洞を手
 にした、白衣の看護婦を従へて、眞中に院長夫人。雲を開いたやうに階子段を上へ、髪が見えて、
 肩、帯が露れる。

質素な浴衣に晝夜帯を……尤もお太鼓に結んで、紅鼻緒に白足袋であつたが、冬の夜などは寢
 衣に着換へて、淺黄の扱帯と云ふ事がある。そんな時は、寢白粉の香も薫る、夫はた異香薫る
 が如く、患者は御來迎、と稱へて隨喜渴仰。

また實際、夫人が其の風采、其の容色で、看護婦を率ゐるた状は、常に天使の如く拜まれるので

あつたに、如何にやしけむ、近い頃、殊に今夜あたり、色艶勝れず、圓鬚も重さうに首垂れて、
 胸をせめて袖を襲ねた状は、慎ましげに床し、とよりは、悄然と細つて、何か目に見えぬ縛の八
 重の繩で、風に靡く弱腰かけて、ぐるぐると巻かれたやう。従つて、前後を擁した二體の白衣も、
 天にもし有らば美しき獄卒の、法廷の高き處へ夫人を引立てて來たやうである。

扉を開放した室の、患者無しに行抜けの空は、右も左も、折から眞白な月夜で、月の表には富
 士の白妙、裏は紫、海ある氣勢。停車場の屋根はきらりと露が流れて輝く。

例に因つて、室々へ、雪洞が入り、白衣が出で、夫人が後姿になり、看護婦が前に向き、ばた
 くばた、ばたくと規律正しい沈んだ音が長廊下に斷えては續き、處々月になり、又雪洞がぼ
 つと明くなつて、やゝあつて、遙かに暗い裏階子へ消える筈のが、今夜は廊下の眞中を、ト一列
 になつて、水彩色の燈籠の繪の浮いて出たやうに、すらく此方へ引返して來て、中程より最上
 些と表階子へ寄つた——右隣が空いた、富士へ向いた病室の前へ來ると、夫人は立留つて、白衣
 は左右に分れた。

順に見舞つた中に、此の一室だけは、行きがけに何爲か残したもので……

只見ると胡粉で書いた番號の札に並べて、早瀬主税と記してある。

道子は間に立つて、徐に左右を見返り、黙つて目禮をして、殆ど無意識に、しなやかな手を伸

ばすと、看護婦の一人が、雪洞を渡して、其は両手を、一人は片手を、膝のあたりまで下げて、ひらりと雪の一團。

づつと離れて廊下を戻る。

道子は扉に吸込まれた。ト思ふと、しめ切らない其の扉の透間から、や、背屈みをしたらしい、低い處へ横顔を見せて廊下を差覗くと、表階子の欄干へ、雪洞を中にして、からみついたやうに成つて、二人附着いて、此方を見て居た白衣が、さらりと消えて、壇に沈む。

四十四

寢臺に沈んだ病人の顔の色は、是が早瀬か、と思ふほどである。

道子は雪洞を裾に置いて、帯のあたりから胸を仄かに、顔を暗く、寢臺に添うてゐんで、心を細めた洋燈のあかりに、其の灰のやうな面を見たが、目は明かに開いて居た。

ト思ふと、早瀬に顔を背けて、目を塞いだが、瞳は動くか、烈しく睫毛が震へたのである。良あつて、

「早瀬さん、私に分りますか。」

「……………」

「漸々今日のお晝頃から、あの、人顔がお分りになるやうにお成んなさいましたさうでございませぬ。」

「お庇様で。」

と確に聞えた。が、腹でもの云ふ如くで、口は動かぬ。

「酷いお熱だつたんでございますのねえ。」

「看護婦に聞きました。ちやうど十日間ばかり、全ツ切人事不省で、驚きました。いつの間にか、最う、七月の中旬ださうで。」と瞑つたまゝで云ふ。

「宅では、東京の妹たちが、皆暑中休暇で歸つて参りました。」

少し枕を動かして、

「英吉君も……………ですか。」

「否、彼の人だけは参りませんの。此の頃ぢや家へ歸られないやうな義理に成つて居りますから、氣の毒ですよ。」

あゝ、然う申せば、と優しく、枕許の置棚を斜に見て、

「貴下は、まあ、嘸東京へお歸りなさらなければ成らなかつたんでございませうに。生憎御病氣で、眞個に間が悪うございましたわね。酒井様からの電報は御覽に成りましたの？」

「見ました、先刻はじめて、
と調子が沈む。」

「二通とも、」

「二通とも。」

「二通は唯（直ぐ歸れ。）ですが、二度目のには、ツタビヤウキ（葛病氣）——豫て妹から承つて居りました。貴下の奥さんが御危篤のやうに存じられます。御内の小使さん、と共に草深の妹とも相談しまして、お枕許で、失禮ですが、電報の封を解きまして、私の名で、貴下が此のお熱の御様子で、残念ですが行らつしやられない事を、お返事申して置きました。ですが、まあ、何と云ふ折が悪いのでございませう。眞個にお察し申して居ります。」

「……病氣が幸です。達者で居たつて、何の面さげて、先生はじめ、顔が合されますもんですか。」「何爲？ 貴下、」

と、熟と顔を据ゑて、俯向いて顔を見ると、早瀬は纔に目を開いて、

「何爲とは？」

「……………」

「第一、貴女に、見せられる顔ぢやありません。」

と云ふ呼吸づかひが荒くなつて、毛布を乗出した、薄い胸の、露はな骨が動いた時、道子の肩わななくして、眞白な手の戦くのが、雪の亂るゝやうであつた。

「安東村へおともをしたのは……夢ではないのでございますね。」

早瀬は差置かれた胸の手に、押し殺されて、恰も呼吸の留るが如く、其の苦を拂はむとするやうに、瘦細つた手で握つて、幾度も口を動かしつつ辛うじて答へた。

「夢ではありません、が、此の世の事では無いのです。お、お道さん、毒を、毒を一思ひに飲まして下さい。」

と魚の渴けるが如く悶ゆる白齒に、傾く鬢からこぼるゝよと見えて、衝と一片の花が觸れた。颯となつた顔を背けて、

「夢でなければ……何うしませう！」

と道子は崩れたやうに膝を折つて、寢臺の端に額を隠した。窓の月は、キラリと笄の艶に光つて、雪燈は仄かに玉の如き頸を照らした。

是より前、看護婦の姿が欄干から消えて、早瀬の病室の扉が堅く鎖されると同時に、裏階子上へ、ふと顯れた一人の婦があつて、堆い前髪にも隠れない、鋭い瞳は、屹と長廊下を射るばかり。其が蹙音を密めて來て、隣の空室へ忍んだことを、斷つて置かねば成らぬ。是は道子等の母

親である。

——同一事が——同一事が……五晩六晩續いた。

四十五

妙なことが有るもので、夜毎に、道子が早瀬の病室を出る時間の後れるほど、人こそ替れ、二人づゝの看護婦の、階子段の欄干を離れるのが遅く成つた。

何うせ其處に待つて居て、一所に二階を下りるのでは無い——要するに、遠くから、早瀬の室を窺ふ間が長く成つたのである、と言ひかへれば言ふのである。

で、今夜も又、早瀬の病室の前で、道子に別れた二人の白衣が、多時宙にかつたやうになつて、欄干の處に居た。

廣庭を一つ隔てた母屋の方では、宵の口から、今度暑中休暇で歸省した、牛込桐楊塾の娘たちに、内の小兒、甥だの、姪だのが一所に成つた處へ、又小兒同志の客があり、草深の一家も來、

ヴァイオリンが聞える、洋琴が鳴る、唱歌を唄ふ——此の人数へ、最う一組。菅子の妹の辰子と云ふのが、福井縣の參事官へ去年の秋縁着いて最う兒が出来た。其の一組が當河野家へ來揃ふと、

此時だけは道子と共に、一族残らず、乳母小間使と子守を交せて、雜と五十人ばかりの人数で、

兩親がついて、豫て是がために、清水港に、三保に近く、田子の浦、久能山、江尻は固より、興津、清見寺などへ、ぶらりと散歩が出来ようと云ふ地を選んだ、宏大な別荘の設があつて、例年

必ず其處へ避暑する。一門の榮華を見よ、と英臣大夫妻、得意の時で、昨年は英吉だけ缺けたが、……今年も怪しい。其のかはり、新しく福井縣の顯官が加はるのである……

扱母屋の方は、葉越に映る燈にも景氣づいて、小さいのが弄ぶ花火の音、松の梢に富士より高く流星も上つたが、今は靜に成つた。

壇の下から音もなく、形の白い脊の高いものが、ぬいと廊下へ出た、と思ふと、看護婦二人は驚いて退つた。

來たのは院長、醫學士河野理順である。

ホワイト襯衣に、縞の粗い慢な筒服、上靴を穿いたが、ビイルを呷つたらしい。充血した顔の、額に顛割のある、髯の薄い人物で、ギラリと輝く黄金縁の目金越に、看護婦等を睨め着けながら、

「君たちは……」

と云うた眼が、目金越に血走つた。

「道子に附いて居るんぢやないか。」

「は、」と一人が頭を下げる。

「何うしたか。」

「は、早瀬さんの室を、お見舞に成ります時は、何時も私どもはお付き申しませんでございませす。」と爽やかな聲で答へた。

「何爲かい。」

「奥様がおつしやいます。御本宅の英吉様の御朋友ですから、看護婦などを連れては豪さうに見えて、容體ぶるやうで氣恥かしいから、とおつしやつて、お連れなさいませんので、は……。」と云ふ。

「何時も然うか。」

と尋ねた時、衣兜に両手を突込んで、肩を揺つた。

「はい、何時でも。」

「む、然うか。」と言ひ棄てに、荒らかに廊下を踏んだ。

「あれ、主人の躑音でございます。」

「院長ですか。」

道子は色を變へて、

「あれ、何うしませう、此方へ参りますよ。アレ、」

「院長が入院患者を見舞ふのに、些とも不思議はありません。」と早瀬は寝ながら平然として云つた。

目も尋常ならず、おろ／＼して、

「両親も知りませんが、主人は酷い目に逢はせますのでございますよ。」としめ木にかけられた様に袖を絞つて立窘むと、

「寢臺の下へお隠れなさい。可いから、」

とむつくと起きた、早瀬は毛布を翻して、夫人の裾を隠しながら、寢臺に屹と身構へたトタンに、

「院長さんが御廻診ですよ！」と看護婦の金切聲が物凄く響いたのである。

理順は既に室に迫つて、あはや開けようとする、何處に居たか、忽然として、母夫人が立露れて、扉に手を掛けた醫學士の二の腕を、横ざまにグツと壓へて……曰く、

「院長。」

と、其の得も言はれぬ顔を、例の鋭い目で、じろりと見て、

「何うぞ、此方へ。否、是非。」

燃ゆるが如き嫉妬の腕を、小脇にしつかり抱込んだと思ふと、早や裏階子の方へ引いて退いた。

螢

四十六

「己が分るか、分るか。お、酒井だ。分つたか、確乎しな。」

酒井俊藏唯一人、臨終のお蔭の枕許に、親しく顔を差寄せた。次の間には……

「あゝ、皆居るとも。妙も居るよ。大勢居るから氣を丈夫に持て！ 唯早瀬が見えん、残念だらう、己も残念だ。病氣で入院をして居ると云ふから、致方が無い。斷念めなよ。」

と、黒髪ばかりは幾千代までも、早や其の下に消えさうな、薄白むだ耳に口を寄せて、

「未來で會へ、未來で會へ。未來で會つたら一生懸命に縋着いて居て離れるな。己のやうな邪魔者の入らないやうに用心しろ。屹度離れるなよ。先生なんぞ持つな。」

己は慙う云ふ事とは知らなんだ。お前より早瀬の方が可愛いから、彼に間違ひの無いやうに、怪我の無いやうにと思つたが、可哀相な事をしたよ。

早瀬に過失をさすまいと思ふ己の目には、お前の影は彼奴に魔が魅して居るやうに見えたんだ。お前を悪魔だと思つた、己は敵だ。間をせいたつて處女ぢやない。眞逢ひたくば、どんなにしても逢へん事はない。世間體だ、一所に居てこそ不都合だが、内證なら大目に見て遣らうと思つたものを、お前たちだけに義理がたく、死ぬまで我慢を爲徹したか。可哀相に。……今更卑怯な事は謂はない、己を怨め、酒井俊藏を怨め、己を呪へよ！

何うだ、自分で心を弱くして、逆も活きられない、死ぬなんぞと考へないで、最う一度石に喰ついても恢復つて、生樹を裂いた己へ面當に、早瀬と手を引いて復讐をして見せる元氣は出せんか、意地は無いか。

最う不可まい喃。

と、忘れたやうなお蔭の手を膝へ取つて、熟と見て、

「瘖せたよ。一昨日見た時より又半分に成つた。——これ、目を開きなよ、確乎しな、己だ、分つたか、あ、先生だよ。皆居る、妙も來て居る。姉さん——小芳か、彼處に居るよ。」

何爲、お前は氣を長くして、早瀬が己ほどの者に成るのを待たん、己でさへ藝者の情婦は持餘して居るんだ、世の中は面倒さな。

あの腰を突けばよろつくな若い奴が、お前を内へ入れて、其で身を立つて行かれるもの

か。共倒れが不便だから、劍突を喰はしたんだが、可哀相に、兩方とも國を隔つて煩らつて、胸一つ擦つて貰へないのは、お前たち何の因果だ。

嘸待つて居るだらうな、早瀬の來るのを。彼が來るから、と云つて、お前、昨夜髪を結つたさうだ。あゝ、島田が好く出來た、己が見たよ。」

と云ふ時、次の室で泣音がした。續いてすゝり泣く聲が聞えたが、其の眞先だつたのは、お蔭の是を結つた、髮結のお増であつた。藝妓島田は名譽の婦が、如何に、丹精をぬきんでたらう。上らぬ枕を取交へた、括蒲團に一が沈んで、後毛の亂れさへ、一入の可傷さに、お蔭は薄化粧さへして居るのである。

お蔭は恥ぢてか、見て欲かつたか、肩を捻つて、鬚を眞向きに、毛筋も透通るやうな頸を向けて、なだらかに掛けた小搔卷の膝の邊に、一波打つと、力を入れたらしく寝返りした。

四十七

「似合つた、似合つた、あゝ、島田が佳く出來た。早瀬なんかに分るものか。顔を見せな、さあ。」とじり、と膝を寄せて、爾時、颯と薄桃色の臉の露んだ、冷たい顔が、夜の風に戦ぐばかり、蔭の隈に佛立つのを、縁から明取りの月影に透かした酒井が、

「誰か來て螢籠を外しな、厭な色だ。」

「へ、い、」と頓興な、ぼやけた聲を出して、め組が繼の當つた千草色の半股引で、縁側を膝立つて來た——婦たちは皆我を忘れて六疊に——中には抱合つて泣いてゐるものもあるので、惣助一人三疊の火鉢の傍に、割膝で畏つて、齒を喰切つた獅嚙面は、額に蠟燭の流れぬばかり、繪にある燈臺鬼と云ふ顔色。時々病人の部屋が寂とする毎に、隣の女連の中へ、四ツ這に顔を出して、

（死んだか、）と聞いて、女房のお増に流眄にかけられ、
（未だか、）と問うて、又睨めつけられ、苦笑ひをしては引込んで控へたのが——大先生の前なり、やがて佛になる人の枕許、謹しんで這つて出て、ひよいと立上つて螢籠を外すと、居すくまつた腰が据らず、ひよろり、で、ドンと縁へ尻餅。魂が碎けたやうに、胸へ亂れて、颯と光つた、籠の螢に、ハット思ふ處を、

「何ですな、お前さん、」

と鼻聲になつて居る女房に劍呑を食つて、慌てて遁込む。

此の物音に、お蔭は又ぱつちりと目を睜いて、心細く、寂しげに、枕を酒井に擦寄せると……皆居る、寂しくは無いよ。然し何うだい。早瀬が來たら、誰も次の室へ行つて貰つて、恙うやつて、二人許りで、言ひたいことがあるだらう。致方が無い斷念めな。斷念めて——己を早瀬だ

と思へ。世界に二人と無い夫だと思へ。早瀬より豪い男だ。學問も出来る、名も高い、腕も有る、彼よりは年も上だ。脊も高い、腹も確だ、聲も大きい、酒も強い、借金も多い、男振も彼より増だ。女房もあり、情婦もあり、娘も有る。地位も名譽も段違ひの先生だ。酒井俊藏を夫と思へ、情夫と思へ、早瀬主税だと思つて、言ひたいことを言へ、したいことをしろ、不足はあるまい。念佛も彌陀も何も要らん、一心に男の名を稱へるんだ。早瀬と稱へて袖に縫れ、胸を抱け、お蔭……早瀬が來た、此處に居るよ。」

と云ふと、縫りついて、膝に乗るのを、横抱きに頸を抱いた。

トつかまらうとする手に力なく、二三度探りはづしたが、震へながら緊乎と、酒井先生の襟を掴んで、

「咽喉が苦しい、あゝ、呼吸が出来ない。素人らしいが、(と莞爾して、)口移しに薬を飲まして……」

酒井は猶豫はらず、水薬を口に含んだのである。

がつくりと咽喉を通ると、氣が遠く成りさうに、仰向けに恍惚したが、

「早瀬さん。」

「お蔭。」

「早瀬さん……」

「む、」

「先、先生が逢つても可いつて、嬉しいねえ！」

酒井は、はらくと落涙した。

おとづれ

四十八

婦系圖

病室の寢臺に、うつら／＼して居た早瀬は、フト目が覺めたが……昨夜あたりから、歩行いて廁へ行かれるやうに成つたので、最う看護婦も付いて居らぬ。毎晩極つたやうに見舞つてくれた道子が、一昨日の夜の……あの時から、弗つり來ないし、一寝入りして覺めた今は、晝間、菅子に逢つたのも、世を隔てたやうで心寂しい。室内を横傳ひ、未だ何か便り無ささうだから、寢臺の縁に手をかけて、腰を曲げるやうにして出たが、扉の外になると、最う自分でも足の確なのが分つて、兩側の其方此方に、白い金盥に昇永水の薄桃色なのが、飛々の柱燈に見えるのを、氣の毒らしく思ふほど、氣も爽然して、通り過ぎた。

何處も寝入つて、寂として、此の二三日めつきり暑さが増したので、中には扉を明けたまゝ、看護婦が廊下へ雪のやうな裙を出して、戸口に横はつて眠つたのもあつた。遠くで犬の吠ゆる聲はするが、幸ひ誰の呻吟聲も聞えずに、更けて彼是二時であらう。

厠は表階子の取附きにもあつて、其處は燈も明いが、風は佳し、廊下は冷たし、歩行くのも物珍らしいので、早瀬は故と、遠い方の、裏階子の横手の薄暗い中へ入つた。

ざぶり水を注げながら、見るともなしに、小窓の格子から田圃を見ると、月は屋の棟に上つたらう、影は見えぬが青田の白さ。

風がそよ／＼と渡ると見れば、波のやうに葉末が分れて、田の水の透いたでもなく、ちら／＼と光つたものがある。緩い、遅い、稻妻のやうに流れて、靄のかゝつた中に、土のひだが數へられる、大巖山の根を低く繞つて消えたのは、何處かの電燈が閃いて映つたやうでもあるし、螢が飛んだやうにも思はれる。

手水と、その景色にぶる／＼と冷くなつて、直ぐに開けて出ようとする。戸の外へ、何か來て立つて居て、其がために重いやうな氣がして、思はず猶豫つて、暗い中に、晝間被かへた自分の浴衣の白いのを、視めて悚然として咳をしたが、口の裡で音には出ぬ。

「早瀬さん。」

「お蔭か、」

と言つた自分の聲に、聞えた聲よりも驚かされて、耳を傾けるや否や、赫と成つて我を忘れて、しやにむに引開けようとした戸が、少ししんで、ヒヤリと氷のやうな冷いものを手に掴むで、其ま、引開けると、裏階子が大な穴のやうに眞黒なばかりで、別に何にも無い。

瓦を嚙むやうに棟近く、夜鴉が、かあ、と鳴いた。

鳴きながら、傳うて飛ぶのを、槽として仰ぎながら、導かれるやうにふら／＼と出ると、聲の止む時、壇階子の横を廊下に出て居た。

只見ると打向ひ遙か斜めなる、渠が病室の、半開きにして來た扉の前に、ちらりと見えた婦の姿。――出たのか、入つたのか、直ぐに消えた。

ばた／＼と、我ながら慌しく蹙音立てて、一文字に駈けつけたが、室へ入口で、思はず釘附にされたやうに成つた。

バサリと音して、一握の綿が舞ふやうに、むく／＼と渦くばかり、枕許の棚を殆ど轉つて飛ぶのは、大きな、色の白い蛾で。

枕をかけて陰々とした、燈の間に、恰も鞠のやうな影がさした。棚には、菅子が活けて置いた、淺黄の天鵝絨に似た西洋花の大輪があつたが、其ではなしに――筋一ツ、元來の藥嫌が、快い

につけて飲忘れた、一度ぶり残つた呑かけの——水薬の瓶に、ばさ／＼と當るのを、熟と瞻めて立つと、トントントンと壇を下りるやうな蹙音がしたので、何處か、と見當も分らず振向いたのが表階子の方であつた。其の正面の壁に、一番明かつた燈が、アハヤ消えさうに成つて居る。

爾時、蛾に向ふ如く、衝と踏込む途端に、

「私ですよ引」と床に沈んで、足許の天井裏に、電話の線を漏れたやうな、夢の覺際に耳に残つたやうな、胸へだけ傳はるやうな、お蔭の聲が聞えたと思ふと、蛾がハタと落ちた。

はじめて心付くと、厠の戸で冷く握つて、今まで握緊めて居た、左の拳に、細い尻尾のひらひらと動くのは、一尾の守宮である。

はつと開くと、雫のやうに、ぼたりと床に落ちたが、足を踏張つたまゝ動きもせぬ。是に目も放さないで、手を伸ばして薬瓶を取ると、伸過ぎた身の發奮みに、蹠踏けて、片膝を支いたなり、口を開けて、垂々と濺ぐと——水薬の色が光つて、守宮の頭を擡げて睨むが如き目をかけて、滴るや否や、くる／＼と風車の如く烈しく廻るのが、見る／＼朱を流したやうに眞赤になつて、ぶる／＼と足を縮めるのを、早瀬は瞳を据ゑて屹と視た。

四十九

早瀬は其の水薬の殘餘を火影に透かして、透明な液體の中に、芥子粒ほどの泡の、風の如くめぐる状に、莞爾して、

「面白い！」

と、投げる様に言葉でたが、恐氣も無く、一分時の前は炎の如く眞紅に狂つたのが、早や紫色に變つて、床に氷ついて、翻つた腹の青い守宮を摘んで、ぶらりと提げて、鼻紙を取つて、薬瓶と一所に、八重にくる／＼と巻いて包むで、枕許の其の置戸棚の奥へ、着換の中へ突込んで、次手に未だ、何か其處等を探したのは、落ちた蛾を拾はうとするらしかつたが、其は影も無い。尙棚には、他に二つばかり處方の違つた、今は用ゐぬ、同一薬瓶があつた。其の一個を取つて、ハタと叩きつけると、床に粉々に成るのを見向きもしないで、躍上るやうに勢込んで寢臺に上つて、無手と高胡坐を組んだと思ふと、廊下の方を屹と見て、

「馬鹿な奴等！誰だと思ふ。」

と言ふと齊しく、仰向けに寝て、毛布を胸へ。——鶏の聲を聞きながら、大膽不敵な聲で、すや／＼と寝たのである。

曉かけて、院長が一度、河野の母親大夫人が一度、前後して、此の病室を差覗いて、人知れず……立去つた。

早瀬が目を覚ますと、受持の看護婦が、
「薬は召上りましたか。瓶が落ちて破れて居りましたが。」

と注意をしたのは言ふまでも無かつた。
で、新しい瓶が最う来て居たが、此の分は平気で服した。

其の日燈の點く些と前に、早瀬は帯を緊直して、看護婦を呼んで、

「お世話に成りました。お庇様で何うやら助りました。最う退院をしまして宜しいさうで、後の保養は、河野さんの皆さんが行らつしやる、清水港の方へ来て爲ては何うか、と云つて下さいますから、参らうかと思ひます。何にしても一旦塾の方へ引取りますが、種々用がありますから、人を遣つて、内の小使をお呼び下さい。其から、お呼立て申して濟みませんが、少々お目に懸りたい事がございます。一寸此室までお運びを願ひたい、と河野さんに。……否、院長さんぢやありません、母屋にいらつしやる英臣さん。」

「はあ、大先生に……申し上げませう。」

「何うぞ。あゝ、もし、もし、」

と出掛けた白衣の、腰の肥いのを呼留めて、

「御書見中でもありましたら、御都合に因つて、此方から参りましても可うございますと。」

馴染んで居るから、黙つて頷いて室を出て、表階子の方へ蹺音がして、其切忙しい夕暮の蟬の聲。何處かの室で、新聞を朗讀するのが聞えたが、ものの五分間経つたのでは無かつた。二階も未だ下り切るまいと思ふのに、看護婦が、ばたく忙しく引返して、發奮に突込むやうに顔を出して、

「お客様ですよ。」

「島山さんの？」

と言ふ、呼吸も引かず、早瀬は目を睜つて茫然とした。

昨夜の事の不思議より、今目前の光景を、却つて夢かと思ふやう、恍惚と成つたも道理。

看護婦の白衣にかさなつて、紫の矢絰の、色の薄いが鮮麗に、朱緞子に銀と觀世水の稍幅細な帯を胸高に、緋鹿子の背負上げして、ほんのり櫻色に上氣しながら、此方を見入つたのは、お妙である！

「まあ！……」

ときよとんとして早瀬は只と瞻めた。

「主税さん。」

と、一年越、十年も戀しく百年も可懐い聲をかけて、看護婦の傍をすつと抜けて眞直に入つた

が、

「最う快くつて？」

と胸を斜めに、帯にさし込む塗骨の扇子も共に、差覗くやうにした。

「お嬢さん……」とまだ憎として居る。

「しばらくね。」

と前へ言はれて、はじめて吃驚した顔をして、

「先生は？」

「宜しくつて、母さんも。」と、ちやんと云ふ。

五十

寢臺と椅子との狭い間、目前に其の燃ゆるやうな帯が輝いて居るので、迂り下りようとする、其も成らず。蒼空の星を仰ぐが如く、お妙の顔を見上げながら、

「何うして来たんです。誰と。貴女。何時。何の汽車で。」と、一呼吸に慌しい。

「今日の正午の汽車で、今来たわ。惣助ッて肴屋さんが一所なの。」

「え、め組がお供で。何うして彼を御存じですね。」

「お薦さんの事よ。」

と言ひかける、口の蒼が動いたと思ふと、睫毛が濃くなつて、ほろりとして、振返ると、未だ其處に、看護婦が立つて居るので、慌てて袂を取つて、揉込むやうに顔を隠すと、美しい眉のはづれから、振が跳つて、朱鷺色の絹の長襦袢の袖が落ちる。

「今そんな事を聞いちや、厭！」

と突慳貪なやうに云つた。勿、問ひそ其處に人あるに、涙得堪へず、と言ふのである。

看護婦は心得て、

「では、あの、お言託は。」

「些と後にして頂きませう。お嬢さん、而して、お伴をしました、め組の奴は？」

「停車場で荷物を取つて来るの。半日なら大丈夫だつて、氷につけてね、貴下の好きなお魚を持つて来たのよ。病院なら直き分ります、早くいらつしやいつて、車を然う云つて、あの、私も早く来たかつたから、先へ来たわ。皆、然うやつて思つてるのに、貴下は酷いわ。手紙も寄越さないんですもの。お薦さん……」

と又聲が曇つて、黙つて差俯向いた主税を見て、

「あの、私ねえ、いろいろ、澤山話があるわ。入院していらつしやる、と云ふから、どんなに悪い

んだらうと思つたら、起きて居られるのね。其だのに、まあ……お蔭さん……私……貴下に叱言を言ふこともあるけれど、大事な用があるから、其れを済ましてから緩りしませうね。」

と甘えるやうに直ぐ變つて、然も親しげに、

「小刀はあつて？」

餘り唐突な問だつたから、口も利けないで……又目を睜る。

「では、さあ、私の元結を切つて頂戴。」

「元結を？お嬢さんの。」

「え、私の髪の毛の、」

と、主税が後へすらないと其の膝に乗つたらう、色気もなく、寢臺の端に、後向きに薄いお太鼓の腰をかけると、緋鹿子が又燃える。其ま、お妙は俯向いて、玉の如き頸を差伸べ、

「お切んなさいよ、さあ、早くよ。父上も知つて居てよ、可いんだわ。」

と美しく流眊に見返つた時、危なく手がふるへて居た。小刀の尖が、夢の如く、元結を弾くと、ゆら／＼と下つた髪を、お妙が、はらりと掉つたので、颯と流れた薄雲の亂る、中から、弗と落ちた一握の黒髪があつて、主税の膝に掛つたのである。

早瀬は氷を浴びたやうに悚然とした。

「お蔭さんに託つたの。あの、記念にね、貴下にかけて下さいって、主税さん、」

と向う状に、椅子の凭に俯伏せに成ると、抜いて持つた簪の、花片が、リボンを打つて激しく揺れて、

「最う其の他には逢へないのよ。」

お蔭の記念の玉の緒は、右の手に燃ゆるが如く、ひや／＼と練衣の氷れる如き、筒井筒振分けで、丈にも餘るお妙の髪に、左手を密と掛けながら、今はなかくに胴据つて、主税は、もの言ふ聲も確に、

「亡くなつたものの髪毛なんぞ。……」

飛んでも無い。先生が可い、とおつしやいましたか、奥様が可い、とおつしやつたんですかい。こんなものをお頭へ入れて。御出世前の大事なお身體ぢやありませんか。あ、鶴龜々々、」

と貴いものに觸るやうに、靜に其の緑の艶を撫でた。

「私、出世なんかしたか無いわ。髪結さんにでも何にでも成つてよ。」

と勇ましく起直つて、

「父さんがね、主税さん、病氣が治つたら東京へお歸んなさいって、而して、あの、……お墓參をさせうね。」

日盛りの田畝道には、草の影も無く、人も見えぬ。村々では、朝から蓐を下ろして、羽目を塞いだのさへ少くない。田舎は律義で、日蝕は日の煩ひとて、其の影には毒あり、光には魔あり、熱には病ありと言傳へる。然らぬだに其の年は九分九厘、殆ど皆既蝕と云ふのであつた。

早朝日の出の色、どんよりとして居たのが、其まゝ、冴えもせず、曇りもせず。鶏卵色に濁りを帯びて、果し無き蒼空に唯一つ。別に他に輝ける日輪があつて、恰も其の錐形の如く、灰色の野山の天に、寂寞として見えた――

風は終日無かつた。蒸々と悪氣の籠つた暑さは、其處等の田舎屋を壓するやうで、空氣は大磐石に化したる如く、嬰兒の泣音も沈み、鶏の羽さへ羽叩くに懶げで、庇間にかけて階子に留まつて、熟と中空を仰ぐのさへ物ありさうな。透間に射し入る日の光は、風に動かぬ粉にも似て、人の袖に灰を置くやう、身動にも拂はれず、物蔭にも消えず、細かに濃く引包まれたかの思がして、手足も顔も同じ色の、蠟にも石にも固るか、とばかり次第に息苦しい。

白晝凝つて、盡く太陽の黄なるを包む、混沌たる雲の凝固とならむす光景。萬有あはや死せむとす、と忌はしき使者の早打、しつきりなく走るは鴉で。黒き磔の如く、灰色の天狗の如く亂れ飛ぶ、と是に驚かされたやうに成つて、大波を打つのは海よ。其の、山の根を敲り、岩に躍り、渚に翻つて、沖を高く中空に動けるは、我こゝに天地の間に充滿たり、何物の怪しき影ぞ、圓なる太陽の光を蔽ふやとて、大紅玉の惱める面を、拭ひ洗はんと、苛立ち、悶え、慣れる状があつたが、日の午に近き頃には、まさに其力盡き、骨萎えて、又如何ともする能はざる風情して、此の流動せる大偉人は、波を伏せ激きを収めて、なよ／＼と擴げた蒼き綿のやうに成つて、興津、江尻、清水をかけて、三保の岬、田子の浦、久能の濱に、音をも立てず倒れたのである。

一分忽ち缺け始めた、日の二時頃、何の落人か慌しき車の音。一町ばかりを絶えず續いて、轟轟と田舎道を、清水港の方から久能山の方へ走りして通る、數八臺。眞前の車が河野大夫人富子で、次のが島山夫人菅子、續いたのが福井縣參事官の新夫人辰子、是が三番目の妹で、其の次に高島田に結つたのが、此の夏然る工學士と又縁談のある四番の操子で、五ツ目の車が絹子と云ふ、三五の妙齡。六臺目にお妙が居た。

一所に東京へと云ふのを……仔細あつて……早瀬が留めて、清水港の海水浴に誘つたのである。お妙の次を道子が乗つた。ドン尻に、め組の惣助、婦ばかりの一群には花籠に熊蜂めくが、此

奴大切なお嬢の傍を、決して離れる事ではない。

是は蓋し一門の大統領、從五位勳三等河野英臣の發議に因て、景色の見物かねて、久能山の頂で日蝕の觀測をしようとする催で。此の人達には花見にも月見にも變りはないが、驚いて差覗いた百姓たちの目には、天宮に蝕の變あつて、天人たちが遁げるのだと思つたらう。

共に清水港の別荘に居る、各々の夫は、別に船をしつらへて、三保まはりに久能の濱へ漕ぎ寄せて、孰も其の愛人の歸途を迎へて、夜釣をしながら海上を戻る計畫。

小兒たち、幼稚いのは、傳、乳母など、一群に、今日は別荘に残つた次第。既に前にも言つたやうに、此の發議は英臣で、眞前に手を拍つて賛成したのは菅子で、餘は異論なく喜んで同意したが、島山夫人は就中得意であつた。

と云ふのは、去年汽車の中で、主税が伊太利人に聞いたと云ふのを、夫人から話し傳へて、未だ何等の風説の無い時、東京の新聞へ、此の日の現象を細かに論じて載せたのは理學士であつたから。其の名忽ち天下に傳へて、静岡では今度の日蝕を、(島山蝕)——とさへ稱へたのである。

五十二

田を行く時、白鷺が驚いて立つた。村を出る時、小店の庭の松葉牡丹に、ちら／＼一行の影が

さした。聯る車は、薄日なれば母衣を拂つて、手に手にさしかざしたいろ／＼の日傘に、恰も五彩の絹を中空に吹き靡かした如く、死したる風も颯と涼しく、美女たちの面を拂つて、久能の麓へ乗附けたが、途中では一人一人、行脚の僧にも逢はなかつたのである。

蝕あり、變あり、兵あり、亂ある、魔に圍まれた今日の、日の城の黒雲を穿つた抜穴の岩に、足がかりを刻んだ様な、久能の石段の下へ着くと、茶店は皆々と眞夜中の如く戸を鎖して、蜻蛉も飛ばず。白茶けた路ばかり、あか／＼と月影を見るやうに、寂然として居るのを見て、大夫人が、

「野蠻だね。」

と嘲笑つて、車夫に指揮して、一軒店を開けさして、少時休んで、支度が出来ると、歸りは船だから車は不殘歸す事にして、扱て大なる花束の絲を解いて、縦に石段に投げかけた七人の褌袂、ひら／＼と扇子を使ふのが、宛然蝶のひらめくに似て、め組を後押へで、あの、石段にかゝつた。

が、河野の一族、頂へ上つたら、思ひがけない人を見よう。
是より前、相貌堂々として、何等か銅像の搖ぐが如く、頤に髻長き一個の紳士の、握に銀色の燦爛たる、太く逞き杖を支いて、ナポレオン帽子の庇深く、額に暗き皺を刻み、満面に燃るが如き怒氣を含んで、頂の方を仰ぎながら、靴音を沈めて、石段を攀ぢて、松の梢に隠れたの

があつた。

是なむ、こゝに正に、大夫人が爲せる如く、海を行く船の龍頭に在るべき、河野の統領英臣であつたのである。

英臣が、此の石段を、最上一階で、東照宮の本殿に成らうとする、一場の見舞に上り着いて、海面が、高く其の骨組の丈夫な雙の肩に懸つた時、音に聞えた勘助井戸を左に、右に千仞の絶壁の、豆腐を削つたやうな谷に望んで、幹には浦の苦屋を透し、枝には白き渚を掛け、縁に細波の葉を揃へた、物見の松を其ぞと見るや——松の許なる据置の腰掛に、長く成つて、肱枕して、面を半ば中折の帽子で隠して、羽織を疊んで、懐中に入れて、枕した頭の傍に、藥瓶かと思ふ、小さな包を置いて、悠々と休んで居た一個の青年を見た。

と立向つて、英臣が杖を前につき出した時、日を遮つた帽子を拂つて、柔かに起直つて、待構へ顔に屹と見迎へた。其の青年を誰とかなす——病後の色白きが、清く瘡せて、鶴の如き早瀬主税。

英臣は庇下りに、じろりと視めて、

「疾かつた、なう。」と鷹揚に一ツ頷でしやくる。

「御苦勞様です。」

と、主税は仰ぐやうにして云つた。

「否、此處で話せうと云うたのは私ぢやで、君の方が病後大儀ぢやつたらう。しかし、こんな事を、好んで持上げたのは其方ぢやて、五分々々か、なう、は、は、は、」

と髯の中に、唇が薄く動いて、せゝら笑ふ。
早瀬は軽く微笑みながら、

「まあ、お掛けなさいまし。」

と腰掛けた傍を指で弾いた。

「や、此處で可え。話は直き分る。」と英臣は杖を脇挟んで、葉巻を銜へた。

「早解りは結構です、其處で先日のお返事は？」

「何うか爲い、と云ふんぢやつた、なう。最う一度云うて見い。」

「申しませうかね。」

「うむ、」

と吸ひつけた唾を吐く。

圖系婦

「此處で極めて下さいませうか。過日、病院で掛合ひました時のやうに、久能山で返事しようぢや困りますよ。此處は久能山なんですから。又と云つちや龍爪山へでも行かなきゃならない。然う

すりや、宛然天狗が寄合ひをつけるやうです。」

「餘計な事を言はんで、簡單に申せ。」

と今の諧謔に稍怒氣を含んで、

「私が對手ぢや、立處に解決して遣る！」

「第一！」

と言つた……主税の聲は朗であつた。

「貴下の奥さんを離縁なさい。」

隼

五十三

一言亡狀を極めたにも係はらず、英臣は却つて物靜に聞いた。

「何爲か。」

「馬丁貞造と不埒して、お道さんを産んだからです。」

強ひて言を落着けて、

「それから、」

「第二、お道さんを私に下さい。」

「何でぢや？」

「私と、い、中です。」

「む、」

と口の内と言つた。

「それから、」

「第三、お菅さんを、島山から引取つてお了ひなさい。」

「何爲な。」

「私と約束しました。」

「誰と？」

「はたと目を怒らすと、早瀬は澄まして、」

「私とさ。」

「應、其から？」

「第四、病院をお潰しなさい。」

「何爲かい。」

「醫學士が毒を装ります。」

「まだ有つた、なう。」と、落着いて尋ねた。

「河野家の家庭は、斯の如く汚れ果てた。……最早や、悴の嫁を娶るのに、他の大切な娘の、身分系圖などを檢べるやうな、不埒な事はいたしませんまい。又一門の繁榮を計るために、娘どもを餌にして、婿を釣りますまい。」

就中、獨逸文學者酒井俊藏先生の令嬢に對して、身の程も辨へず、無禮を仕りました申譯が無い、とお詫びなさい。

然うすりや大概、河野家は支離滅裂、貴下の所謂家族主義の滅亡さ。其處で敗軍した大將だ。

貴下は安東村の貞造の馬小屋へでも引込むんだ。雑と、まあ、是だけさ。」

と帽子で、そよ／＼と胸を煽いだ。

時に蝕しつある太陽を、彌が上に蔽ひ果さむする修羅の叫喚の物凄く響くが如く、油蟬の聲の山の根に染み入る中に、英臣は荒らかな聲して、

「發狂人！」

「あゝ、狂人だ、が、他の氣遣は出来ないことを云つて狂ふのに、此の狂氣は、出来る相談をし

て澄まして居るばかりなんだよ。」

舌もや、釣る、唇を蠢かしつつ、

「で、私が其の請求を肯かんけりや、汝、何うすツとか言ふんぢやなう。」と、太息を吐いたのである。

「此の毒藥の瓶を以つて、些と古風な事だけれど、恐れながらと、遣らうと云ふのだ。其でも大概、貴下の家は寂滅でせうぜ。」

英臣は辛うじて罵り得た。

「騙ぢやなう、」

「騙ですとも。」

「強請ぢやが。汝、」

「強請ですとも。」

「其で汝人間か。」

「畜生でせうか。」

「其でも獨逸語の教師か。」

「否、」

「學者と言はれようか。」

「何ういたしまして、」

「酒井の門生か。」

「静岡へ来てからは、そんな者ぢやありません。騙です。」

「何、騙ぢや、」

「強請です。畜生です。而して河野家の仇なんです。」

「黙れ！」

と一喝、虎の如き唸をなして、杖を棒と握つて、

「無禮だ。黙れ、小僧。」

「何だ、小父さん。」

と云つた。英臣は身心ともに燃ゆるが如き中にも、思はず掉下す得物を留めると、主税は正面へ顔を出して、呵々と笑つて、

「おい、己を、まあ、何だと思ふ。浅草田畝に巢を持つて、観音様へ羽を伸すから、筆の力と緯名アされた、掏摸だよ、巾着切だよ。は、は、は、是から其の氣で附合ひねえ、慥う、頼むぜ、小父さん。」

五十四

「己が十二の小僧の時よ。朝露の林を分けて、時を奥山へ出たと思ひねえ。蛙の面へ打かけるやうに、仕かけの噴水が、白粉の禿げた霜げた姉さんの顔を半分仕切つて、酒亞と出て居ら。其處の釣堀に、四人連、皆洋服で、未だ酔の醒めねえ顔も見えて、帽子は被つても大童と云ふ體だ。芳原げえりが、朝ッばら鯉を釣つて居るぢやねえか。」

釣つてるのは鯉だけれど、何處のか田畝の鱒だらう。官員で、朝歸りで、洋服で、釣つてりや馬鹿だ、と天窓から呑んでかゝつて、中でも鮒らしい奴の黄金鎖へ手を懸ける、と了つた！ 此腕を呻と握られたんだ。

掴へて打ちでもする事か、片手で澄まし込んで釣るぢやねえか。釣つた奴を籠へ入れて、(小僧是を持つて供をしる。)ツて、一睨睨まれた時は、生れて、はじめて縮んだのさ。

こりや成程ちよろツかな(筆)の手でいかねえ。よく顔も見なかつたのが此方の越度で、人品骨柄を見たつて知れる——其頃は臺灣の屬官だつたが、今ぢや同一所の税關長、稻坂と云ふ法學士で、大鵬のやうな人物、ついて居た三人は下役だね。

後で聞きや、或時も、結婚したての細君を連れて、芳原を冷かして、格子で馴染の女に逢つて、

(一所に登樓るぜ)と手を引いて飛込んで、今夜は情女と遊ぶんだから、お前は次の室で待つて
るんだ、と名代へ追ひ遣つて、遊女と寝たと云ふ豪傑さね。

其ツ切、細君も妬かないが、旦那も嫉氣少しもなし。

何時か三月ばかり臺灣を留守にして、若い其の細君と女中と書生を残して置くと、何處の婦も
同一だ。前から居る下役の媽々ども、いづれ夫人とか、何子とか云ふ奴等が、女同士、長官の細
君の、年紀の若いのを猜んだ奴さ。下女に鼻薬を飼つて讒言をさせたんだね。其の法學士が内へ
歸ると、(お歸んなさいまし、さて奥様はひよんな事)と、書生と情交があるやうに言ひつける。
とよくも聞かないで、——(出て行け)——と怒鳴り附けた。

誰に云つたと思ひます。細君ぢやない、其の下女にさ。

何うです。のろかつたり、妬過ぎたり、凡人業ぢやねえやうな、河野さん、貴下のお婿様連に
や、恚う云ふのは有りますまい。

己が掴つたのは其の人だ。首を縮めて、鯉の入つた籠を下げて、(魚籃)の丁稚と云ふ形で、つ
いて行くと、腹こなしだ、とぶらりく、晝頃まで歩行いてさ、其から行つたのが眞砂町の酒井
先生の内だつた。

學校のお留守だつたが、親友だから、つか／＼と上つて、小僧も二階へ通されたね。(奥さん、

是にもお膳を下さい。)と拘摸にも、同一やうに、吸物膳。

女中の手には掛けないで、酒井さんの奥方ともあらう方が、未だ少かつた——縮緬のお羽織で、
膳を据ゑて下すつて、(遠慮をしないで召食れ)と優しく言つて下すつた時にや、己始めて涙が
出たのよ。

先生がお歸りなさると、四ツ膳の並んだ末に、可愛い小僧が居るぢやねえか。(何だい)と聞か
れたので、法學士が大口開いて(拘摸だよ)と言はれたので、弗つり留める氣に成つたぜ、犬畜
生だけ、情には脆いのよ。

法學士が、(さあ、使賃だ、祝儀だ)と一圓出して、(酒が飲めなきや飯を食つて最う歸れ、御
苦勞だつた、今度ツからもつと上手に攫れよ)と言はれて、疊に喰つて泣いて居ると、(親がな
いんだわねえ)と、勿體ねえ、奥方の聲がうるんだと思ひねえ。(晩の飯を内で食つて、翌日の飯
を又内で食はないか、酒井の籠で飼つて遣らう、隼)と、それから親鳥の聲を眞似て、今でも轉
る獨逸語だ。

世の中や河野さん、こんな猿を養つて、育ててくれる人も有るのに、お前さん方は、まあ何
と云ふ、べらぼうな料簡方だい。
可愛い娘たちを玉に使つて、月給高で、婿を選んで、一家の繁昌とは何事だらう。

たま〜人間に生を受けて、然も別嬪に生れたものを、一生に唯一度、生命とはつりがへの、色も戀も知らせねえで、盲鳥を占めるやうに野郎の懐へ捻込んで、いや、貞女になれ、賢母になれ、良妻になれ、と云つたつて、手品の種を通はせやしめえし、然う、うまく行くものか。見たが可い、慙う、己が腕が一寸觸ると、學校や、道學者が、新粉細工で拵へた、貞女も賢母も良妻も、ばた〜と將棊倒した。」

英臣の目は血走つた。

五十五

「河野の家には限らねえ。凡そ世の中に、家の爲に、女の兒を親勝手に縁附けるほど慘たらしい事はねえ。お爲ごかしに理窟を言つて、動きの取れないやうに説得すりや、十六や七の何にも知らない、無垢な女が、頭一ツ掉り得るものか。羞含んで、ぼうと成つて、俯向くので話が極つて、赫と逆上せた奴を車に乗せて、回生劑のやうな酒をのませる、此奴を三々九度と云ふのよ。其處で寝て起りや人の女房だ。」

うつかり他と口でも利きや、直ぐに何の彼と言はれよう。其で二人が繋つて、光つた態でもして歩行けば、親達は緋緘の鎧でも着たやうに汝が肩身をひけらかすんだね。

娘が惚れた男に添はせりや、譬ひ味噌漉を提げたつて、玉の冠を被つたよりは嬉しがるのを知らねえのか。傍の目からは筵と見えても、當人には綾錦だ。亭主は、おい、親のものぢや無えんだよ。

己が言ふのが嘘だと思つたら、お道さんに聞いて見ねえ。病院長の奥様より、馬小屋へ入つても、早瀬と世帯が持たたいとよ。お菅さんにも聞いて見ねえ。」

「不埒な奴だ？」

と揺いた英臣の髻の色、口を開いて、黒煙に似た。

「不埒は承知よ。不埒を承知でした事を、不埒と言つたつて忤然ともしねえ。豪い、と讚めりや吃驚するがね。」

今更慌てる事はないさ、はじめから知れて居ら。お前さんの許のやうな家風で、婿を持たした娘たちと、情事をするくらゐ、下女を演劇に連出すより、もつと容易いのは通相場よ。

慙う、最う威張つたつて仕やうがねえ。恐怖くは無いと言へば、」

と微笑みながら、

「そんな野暮な顔をしねえで、よく言ふことを聞け、と云ふに。——
おい、未だ驚く事があるぜ。最う一枝、河野の幹を榮ささうと、お前さんが頼みにして居る、

四番目の娘だがね、つい、此の間、暑中休暇で、東京から歸つて來た、手入らずの嬢さんは、醫學士にけがされたぜ。

己に毒藥を装らせたし、ばれか、つたお道さんの一件を、穩便にさせるために、大奥方の計らひで、院長に押附けたんだ。己と合棒の萬太と云ふ、幼馴染の拘摸の夥間が、丁と材料を上げて居ら。

矢張り家の爲だらう。河野家の名譽のために、舊惡を知つてる上、お道さんと不都合した、早瀬と云ふ者を毒殺しようと、娘を一人傷物にしたんぢやないか。

其處を言ふのだ。兒よりも家を大切がる残酷な親だと云ふのは、よ。

何故手をついて懺悔をしない。悪かつた。是からは可愛い娘を決して名聞のためには使ひますまい。家柄を鼻にかけて他の娘に無禮も申掛けますまい、と恐入つて了はないよ。

小兒一人犠牲にして、毒藥なんぞ装らないでも、坊主になつて謝んねえな。」

五十六

面も觸らず言を繼ぎ、

「其に、お前さん何と云つた。——此の間も病院で、此の掛合をする前に、念のために聞いた時

だ。

斷つて英吉君の嫁に欲しいとお言ひなされる、私が先生のお妙さんは、實は柳橋の藝者の子だが、其でも差支へは無いのですか、と尋ねたら、お前さん、以ての外な顔をして、いや、途方もない。そんな賤しい素性の者なら、譬へ英吉が其の爲に、憧れ死をしようとも、己たち兩親が承知をせん。家名に係はる、と云つたらう。

恚う、お前たちにや限らねえ。世間にや然うした情無え了簡な奴ばかりだから、そんな奴等へ面當に、河野の一家を鎗玉に擧げたんだ。

はじめから話にならねえ縁談だから可いけれど、是が先生も承知の上、嬢さんも好いた男で、いざ、と云ふ時、然でねえ系圖しらべをされて、藝者の子だと云ふだけで、破談にでもなつた時の、先生御夫婦、お嬢さんの心持はどんなだらう。

己ら其を思ふから、人間並にや附合へねえ肩書つきの悪丁稚を、一人前に育てた上、大切な嬢さんに惚れて居るなら添はして遣らう、とおつしやつて下すつた、先生御夫婦のお志。拘摸の野郎と顔をならべて、似而非道學者の坂田なんぞを見返さうと云つた江戸兒のお嬢さんに、一式の恩返し、二ツあつても上げたい命を、一ツ棄てるのは安價いものよ。

お前さんにや氣の毒だ。嘸御迷惑でございませう。」

と丁寧ていねいに笑わらつて言いつて、

「迷惑めいわくや氣きの毒どくを斟酌しんしゃくして巾着切きんちやくぎりが出来できるものか。眞人間まにんげんでない者に、お前まえ、道理だうりを説といたつて、義理ぎりを言いつて聞きかしたつて、巡查おまはりほどにも恐こはくは無なえから、言句もんくなしに往生わうじやうするさ。軍いくさに負まけた、と思おもへば可よからう。

拘摸すわりの指ゆびで突ついても、倒たふれるやうな石垣いしがきや、蟻ありで崩くづれる濠ほりを穿ほつて、河野かうのの旗はたを立てたてて居ゐたつて、はじまらねえ話はなしぢやねえか。

お前まえさん、嘸口惜さぞくやしからう。打ちたくば打ぶて、殺ころしたくば殺ころしねえ、義理ぎりを知しつて死しぬやうな道理だうりを知しつた已おれぢやねえが、嬢ぢやうさんに上あげた生命いのちだから、其生命そのいのちを棄すてるので、お道みちさんや、お首すかさんにも、言譯いひわけをするつもりだ。死しんでも寂さびしい事はねえ、女房にようぼうが先いへ行いつて待まつて居ゐら。

お薦つたと二人ふたりが、毒蛇どくじゆに成なつて、可愛かほいいお妙たえさんを守護しゆごする覺悟かくごよ。見みろ、あの龍宮りゆうぐうに在ある珠たまは、悪龍あくりゆうが絡まとひ繞めぐつて、其器そのうはに非あらずして濫みだりに近ちかづく者ものがあると、呪殺のろひころすと云いふぢやないか。

呪詛のろはれたんだ、呪詛のろはれたんだ。お妙たえさんに指ゆびを差さして、お前まえたちは呪詛のろはれたんだ。と膝ひざに手てを置おき、片面はんおもてを、怪あやしきもの走はしるが如ごとく颯さつと暗くらくなつた海うみに向けて、蝕しよくある凄せきき日の光ひかりに、水底みなそこの其その悪龍あくりゆうの影かげに憧あこがる、面色おももちした時とき、隼はやぶさの力ちからの容貌ようぼうは、却かへつて哲學者てつがくしやの如ごときものであつた。

英臣ひでおみは苔蒸こけむせる石いしの動うごかざる如ごとく緘黙かんもくした。

一聲高ひとこゑたからかに雉子きしが啼なくと、山やまは暗くらくなつた。

勘助かんすけ井戸いどの星ほしを覗のぞかうと、末すえの娘むすめが眞先まつききに儼然ひかりと上あつて、續ついて一人々々ひとりひとり、名なある麗人れいじんの靈れいの如ごとく朦朧もうろうとして露あはれた途端とたんに、英臣ひでおみは豫かねて其こゝろの心構こころがまへをしたらしい、矢庭やにわに衣兜かぶとから短銃ビストルを出だして、衝つと早瀬はやせの胸むねを狙ねらつた。あはやと抱いだき留とどめた惣助そうすけは剋倒はねたふされて轉ころんだけれども、渠危かれあやふし、と一目見ひとめて、道子みちこと菅子すがこが、身みを蔽おほひに、背せより、胸むねより、主税ちからを庇かばつたので、英臣ひでおみは、面おもてを背そむけて嘆息たんそくし、忽たちち狙ねらを外そらすや否いなや、大夫人だいがじんを射いて、倒たふして、硝藥せうやくの煙けむりとともに、蝕しよくする目の面おもてを仰あぎつつ、這この傲岸がうがんなる統領とうりやうは、自みづから其そのの腦なうを貫つらぬいた。

抱合だきあつて、目めを見交みかはして、姉妹きょうだいの美人たをやめは、身みを倒さかさまに崖がけに投なげた。あはれ、薦つたに蔓かづらに留とどまつた、道子みちこと菅子すがこが色いろある殘懷なごりは、滅ほろびたる世よの海うみの底そこに、珊瑚さんごの碎くだけしに異ことならず。

折をりから沖おきを遙はるかに、光ひかりなき晝ひるの星ほしよと見みえて、天てんに連つつた一點いってんの白帆しろほは、二人ふたりの夫等をとらの乗のれる船ふねにして、且かつつ死骸なきがらの俤おちかげに似にたのを、妙子たみこに隠かくして、主税ちからは高たかく小手こてを翳かざした。

其夜そのよ、清水港しみづみなとの旅店りよてんに於おいて、爺おやは山やまへ柴刈しばかりに、と嬢ぢやうさんを慰なぐさめつつ、其そののすやくと寐ねたのを見みて、お薦つたの黒髪くろかみを抱いだきながら、早瀬はやせは潔さきよく毒どくを仰あいだのである。

早瀬の遺書は、酒井先生と、河野とに二通あつた。

其の文學士河野に宛てたは。——英吉君……島山夫人が、才と色とを以て、君の爲に早瀬を擒にしようとしたのは事實である。又我自から、道子が温良優順の質に乗じて、謀つて情を迎へたのも事實である。けれども、其の孰の操をも傷けぬ。雙互に唯だ默會したのに過ぎないから、乞ふ、兩位の令妹のために、其の淑徳を疑ふことなけれ。特に君が母堂の馬丁と不徳の事の如きは、あり觸れた野人の風説に過ぎなかつた。——事實でないのを確めたに就いて、我が最初の目的の達しられないのに失望したが、幸か、不幸か、淺間の社頭で逢つた病者の名が、偶然貞造と云ふのに便つて、狂言して姉夫人を誘出し得たのであつた。従つて、第四の令妹の事は固より、毒藥の根も葉もないのを、深夜蛾が燈に斃ちたのを見て、思ひ着いて、我が同類の萬太と謀つて、渠をして調へしめた毒藥を、我が手に藥の瓶に投じて、直ちに君の家嚴に迫つた。

不義、毒殺、たとへば父子、夫妻、最親至愛の間に於ても、其の實否を正すべく、是を口にすべからざる底の條件を以て、咄嗟に雷發して、河野家の家庭を襲つたのである。私は拘賊だ、はじめから敵に對しては、機謀權略、反間苦肉、有ゆる辣手段を弄して差支へないと信じた。要は唯、君が家系門閥の誇の上に、一部の間隙を生ぜしめて、氏素性、恁の如き早瀬の前に幾分の讓歩をなさしめむ希望に過ぎなかつたに、思はざりき、久能山上の事あらむとは。我は偏に、

君の家嚴の、左右一顧の餘裕のない、一時の激怒を惜むとともに、清冽一塵の交るを許さぬ、峻嚴なる其の主義に深大なる敬意を表する。

英吉君、能ふべくは、我意を體して、より美しく、より清き、第二の家庭を建設せよ。人生意氣を感じずや——云々の意を認めてあつた。門族の榮華の雲に蔽はれて、自家の存在と、學者の獨立とを忘れて居た英吉は、日蝕の日の、蝕の晴る、と共に、嗟嘆して主税に聞くべく、其の頭腦は明に、其眼は輝いたのである。

早瀬は潔く云々以下、二十一行抹消。——前篇後篇を通じ其の意味にて御覽を願ふ。はじめ新聞に連載の時、此の二十一行なし。後單行出版に際し都合により、徒を添へたるもの。或はおなじ單行本御所有の方々の、こゝにお心つかひもあらむかとて。

昭和十五年五月十日印刷
昭和十五年五月十五日發行

鏡花全集第十卷

(寺島製本)



著者

泉鏡太郎いづみ かがやき たち

發行者

岩波茂雄いわなみ すすむ かつ

印刷者

井上源之丞いの上 げん しのぶ

印刷所

凸版印刷株式會社
東京市下谷區二長町一番地

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

發行所

岩波書店

電話(33)二八七・一八八番
九段(33)一八九・一八〇番
振替口座東京七四一六番

小店出版物中、萬一不完全な品(落丁・亂丁)等がありましたら、御手数取らずに洩れなく御申出下さる事を御願ひ致します。たとへ御讀後でありましても、早速お取替致します。





